襲ふに止る間は深甚の意味を生じ能はぬではないかと疑ふ。婦人の解放と云ふことにも同情はする。然し問題は解放に存するか、其れともモット廣汎な向上の一事に存するか考へねばならぬ。我輩一人としては結論と云ふも實は何の結論もない唯だ向後の研究題目の輪廓を描き得るに過ぎない。家族と云ふこと結婚と云ふことの神聖を維持するには、婦人の經濟的獨立と云ふ樣な單純なる警語を以て盡すことは出來ぬ。進んだ文明に應ずる進んだ倫理觀の上に立つて經濟上の基礎を築き上げねばならぬ。其には女子の相續權及び夫婦財産制の事も篤と吟味して見ねばならぬ。小さい問題はイクラもある。以上我輩は唯經濟上の立場からのみ漠然と問題の輪廓を描いたに過ぎぬ。我々は議論を行つて人を教へる時期と思はぬ、先づ自ら深く考へて研究す可き急務あるを認めるのみである。

右一文「太陽」臨時增刊の求に應じ大正二年六月起稿したるものなり。

二　根本概念雜篇

（改定經濟學研究　第三篇）

一　經濟の本則と營利の主義
二　經濟と經濟行爲の概念に關する誤謬
三　經濟現象と經濟生活
四　實體價値と官能價値
五　貨幣の保全と人格の保全
六　貨幣の新定義としての『カルタル・テオリー』
七　貨幣の本質に關する通說とクナップ氏の新說
八　資本の法則

解題

茲に收むる八章の中一・二・三は經濟てふ根本概念に關する予が舊時の思索を記錄したるものにして、此頃『續經濟學講義』（本全集第一集收錄）に於て更に之れを推擴して考究する所に屬せり。讀者彼是對照して卑見の甚く所を詳かに看取せられんことを希ふ。四・五・六・七の四章はクナップ、ジムメル及び左右田學士の新研究と關連して說を下すもの、にして、其雜白なるは深く愧づる所なり。而して其主たる動機は實に左右田學士の各種の研究に在り、收錄を敢てするは、必竟當時を追憶するの料たらしめんが爲のみ。『資本の法則』の一文元と新聞紙上に揭げたるものなれども、構思の存する所必ずしも一時の問題に拘はるにあらず、亦以て予が平生の懷抱を披瀝するものとす、仍て併錄す。

一　經濟の本則と營利の主義

一　小引

從來の經濟學が最小の勞費を以て最大の効果を收むるにありとする、所謂『經濟の本則』なるものを以て、一定不動終始不變經濟行爲を支配する原則なりとし、甚しきに至ては、此經濟の本則の遂行を以て經濟學終極の目的とすることの非常なる誤謬にして、今日の經濟組織――國民經濟――にありては、此『經濟の本則』と相幷んで、否、多くの場合に於ては、此より遙かに有力に支配する原則の存し、吾人が經濟學に於て研究の對象とする國民經濟の生活にありては『經濟の本則』の遂行よりも、寧ろ此新原則新主義の活動作用を究むるを以て主眼とすべきものなるに就ては、予は屢々自己の所見を公けにして世上の學者の教を待てり。今拙著國民經濟原論（本全集第三集九四三頁以下）の一節を抄出して之を示さん。

『今日の經濟生活にあつては市場生産――營利の主義によりて支配せらるゝ――と云ふものが最も重要なる生産の形態である。市場生産とは前云ふ如く、必ずしも唯經濟上にて云ふ財貨其自身を作り出すといふことを最上の目的とするのでなく、これによりて餘剩の貨幣を贏得すると云ふ目的を達する一つの手段、一つの道行として營む所の生産を云ふのである。例へば工業家が工業を營むのに、必ずしも木綿糸何相、機械何臺を作り出すを以て主要の目的とするのでなく、此等のものを生産するによりて、より餘計貨幣の形に現はれ來る利益を得る、即ちより餘計の貨殖を圖るを以て、第一の目的として、機械なり、木綿糸なり、何でも構はぬ、其時、其處の事情に應じて、唯だ貨幣をより多く持來す可き所のものを生産するを以て主眼とするのである。所謂技術と經濟との相分るゝに至つた所以の神髓は抑も此に存するのである。今日の經濟行爲と云ふのは最も多くの場合に於て、此營利の主義によつて支配せられた貨殖行爲である。而して此の貨殖行爲たる經濟行爲は自足主義の經濟行爲、即ち彼の最小の勞費最大の効果と云ふ、所謂『經濟の本則』によつて支配せらるゝものとは決して混同すべきものではない。其間の區別儼然として存するのである。殊に此等經濟の本則と云ふはもと技術的の立場から割出されたもので、今日の合理的文明社會にあつては、決して獨り經濟上の事のみに限らるゝ譯ではないのである。ありとあらゆる人間の行動は、要するに最小の勞費を以て最大の効果を收めんと欲するから、種々の發明や發見が起つて來、色々の工夫を凝らし、設備を改良して此の『本則』に從ふ樣にと努力して居るのである。何も獨り經濟行爲に限つた次第では決して無いのである。否、今日の經濟生活は此の『本則』より遙かに上に出で、百尺竿頭更らに一歩を進めた處に於て、獨り最小の勞費に應ずる効果を充分に收むるのみならず、更らにより

餘計の餘剩を之れによりて得んとするである。之れを名けて『營利の主義』と云ふ』と。然らば何故に經濟の本則と營利の主義とは異るや。何故に今日の經濟生活は獨り經濟の本則のみを以て律す可からずして却て多々益々營利主義の支配する所となりしや。何故に經濟學は舊來の出立點を改めて、更らに此新規現象を基礎として改造せられざるか。請ふ予が見る所を道はん。

二　手段としての技術

『經濟の本則』と『營利主義』との根本的差異を一言に約せんと欲せば、一は技術的孤立的生活の原則にして、他は資本的社會的の原則なりと云ふ可し。（綫經濟學講義に於ては、前者を循環の生活と呼び、後者を流通の生活と做せり。予が標思の基く所實に玆にあるなり）蓋し人類の經濟生活には一　孤立の狀態に於けるものと二　交通的の狀態に於けるものとの二あり。マルクスを始め多くの學者が此兩者の間に中間の狀態ありとし、經濟生活を區分して三期を劃するは誤なり。若し此中間の狀態ありとせば、孤立の經濟生活より社會的の經濟生活に至るは時期の問題、前後の順序たらざる可からず。然るに古人は古今東西の經濟史を繹ねて、一方には孤立的經濟生活の史的發展と、他方には交通的經濟生活の史的發展との二個の排列の存するを見るのみ。

蓋し經濟の人類生活は、もと欲望充足を以て目的とす。今此目的を達するに第一の要件は外界の自然なり。而して個々の人類が其欲望の充足を得んが爲め、外界の自然と相交涉する、是れ經濟的活動の起る所以なり。外界の自然と交涉して欲望の充足を得んとする手段は、之れを名けて技術と云ふ。卽ち

人 ― 技術 ― 天然

人と天然とは經濟生活の二個の成素にして、其相互の關係は技術なり。此場合に於て此經濟生活を支配する原則は、最小の勞費を以て最大の効果を收めんとする『經濟の本則』あるのみ。『營利の主義』は寸毫も支配することなし。蓋し此場合に於ては、人の勉むる所は『如何にして我が天然に對して用ふる力其ものゝ作用を最も有力ならしむべ

きか』の問題を存するのみ。毫も其間に第三者の介在することなければ、之に對する願慮を用ゐず。一に唯一の相手方たる天然を知り、之を用ゐて最も善く己の欲望を充たすを圖れば能事畢るなり。然るに天然は始めより與へられたる要件なり、其自身に意志を有せざるなり。故に何等かの意志的作用をなすものは、之に對する個人其人のみに限るなり。與へられたる要件が個人其人の欲望を多く充たすと少く充たすとは、一に此意志の主體たる人間の力にありて、天然其物にあらず。天は愚者にも智者にも均しく雨を降し日光を照らす。此雨此日光を用て非常に豐富なる欲望充足の手段を造り出すも人なり。日照り雨降れども毫も之を利用することを爲さず寒饑に斃るゝも亦た人なり。卽ち人は始より與へられたる此天然を利用し、善用して可成多く己れの欲望を充足せんとして努力す。此努力は卽ち技術なり。此技術の目的は與へられたる要件、與へられたる欲望——卽ち天然と人類——との間に立ちて其最上の調和を圖るにあり。之れを爲す道他なし。人が天然に施す行動を最も有効ならしむるにあるのみ。如何にして最も有効ならしむ可きか。答へて曰く、曾す所最も少く、之に對して得る所最も多からしむ可きのみ。『經濟の本則』は卽ち是なり。然るに天然と人間と相對すと云ふは其實外界の特定の地理的地文的境界と其內に生存せる人間の其時其處に有する欲望となり。此二者は一定の欲望充足の活動として顯はるゝ時と處とに於ては一定不動のものなり。二個の一定不動なるものゝ間に介立して經濟の本則を遂行すと云ふときは、其意義は一定の外界に存在する材料を以て、一定の內界の欲望を充たすに方り、其充足の活動を出來得る限り節約することなり。

何となれば、兩對手は一定不動のものなるが故に、技術の力にて之を變更するを須ひず。經濟の本則は結果と原因との二に及ぶを要せず、其の間の手段を支配すれば足る。卽ち此本則が主として手段に關する法則、方法に關する法則として現はるゝ所以なり。換言すれば、經濟の本則は人間の努力に關する法則にして其發動の形態は節約是なり。天然其物を增加し、人類の欲望其物を擴張する所以にあらず。普通の語を以て云へば、消極的の法則なり。而して當事者が天然と人間との二あるときにのみ行はるゝ法則なるが故に、予は假りに之を二界的法則と名けん。此二界は前に云ふ如く、其時に於て與へられた

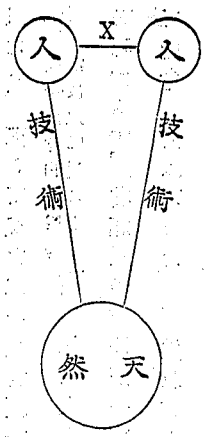
る大さと强さを意味するものなれば、予は又た之を與件的法則と名く。『節約的』『消極的』『二界的』『與件的』なる此の法則は、是等の條件の撤去せらるゝときは、又た其の存在の理由を失ふ可きや當然なり。

今此等條件は此法則をして技術に專屬せしむ。何となれば、技術とは天然と人との間に交渉するの手段を云ふものなればなり。即ち人類の經濟生活が、

と考られ得る時にのみ限れり。若し人類生活の上に於て、此間に更に第三、第四の他の要件、他の成素參入する時は、其人類の經濟生活は技術以上の他の手段を喚起せざるを得ず。技術以外の他の手段起らば、如上の諸條件は從つて變動を免れず。條件變動すれば所謂『經濟の本則』奚ぞ克く其存在の理由を亡はざるを得んや。於茲乎『營利の主義』起る。

三　人と人との交渉

此變動は如何にして起るや。答へて曰く他なし。人と天然との關係の外、別に人と人との關係あるによる。蓋し各人個々に天然に對するの外、又た他の『人』に對して以て其欲望の充足を求むるによるなり。即ち

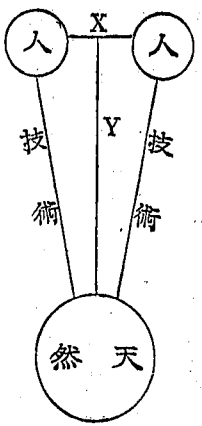


人と人と相交渉するときは、個々別在する時に異り、『人』は最早や與へられたる經濟上の要件にあらず。一定不動の經濟成素にあらず。否相觸れ、相渉ることの益々多きに從ひ、其動性も亦た多々益々增進す。即ち人と天然と相對するときは之を不動的と云ひ――不動產なる語は此意より起る――人と人と相對するとき之を動的――動產は此意なり――と云ふ所以なり。天然の材料中最重要のものたる土地は、又た不動產の最も重要なる一項目なり。人と人との交通の結果に成る資本は之を動產と云ふ。人と人との交

通の非常に高度に達せる社會にありては、不動産も亦た資本なり。

人と人と相交渉すること之を社會的と言ひ始めたり。人と人との相渉ること愈々繁きに從ひ社會性は益々發展す。もと人と人との交通交渉を名つけて『コムメルチユム』と云へり。今日は此の語は商業を意義す。蓋し商業は最も多く人と人との交渉觸接多きを要すればなり。今日は『コムメルチユム』に代へて交通（邦語或は中らず、獨語『フエルケール』最も之に的中すと呼ぶ。人と人と相渉る經濟生活を交通經濟（フエルケールス・ヴヰルトシアフト）と名つくる所以なり。而して又た之を社會經濟とも云ふ。人と人と交渉するは卽ち社會的なればなり。（現今社會的の用語法は之に異るも蓋し單に人と人と交渉することは直ちに社會を形成するものと見る可からず。其相互の交渉が一定の秩序組織規律制裁の下に行はるゝ狀態ありて始めて社會と云ふ可きなり。然れども人と人と相交渉するとき、苟くも何等かの秩序法制（最も廣義にて云ふ）の之を支配するもの存せずと云ふこと到底考へ得可きに非ず（前揭經濟單位論參照）交通經濟を社會經濟と呼ぶを妨げざる所以なり。卽ち人と天然との二個に代ふるに、人と人と天然との存する經濟生活は、單獨なる經濟生活に比して非常に

重大なる差異の存する所以なり。而して既に人と人と交渉す、其交渉は人と人との間の當人關係に止るものに非ず、必ず其交渉の起るると共に——否如此交渉の起る動機として——直ちに其關係を天然と相渉らしむるなり、卽ち人と人との關係（假りにX）以外にYなるもの發生せずして已むものにあらざるなり。



此Xは卽ち社會的の經濟生活にして、予は之れを經濟組織と名く。經濟組織は必ず何等かの秩序法制の下に立つものなり。蓋し人と人との交渉は必ず其何れにも專屬せず、其何れにも偏倚せず、其何れの內界とも全然合致するにあらざる或種の對下的外面的制裁存するものなればなり。然れども此制裁的秩序法制は決して社會生活（以下人と人との交渉を爾か

ざる略の外に存するものにあらず。又た之と相對立するものにあらず。對立すと見ゆる稱すの外に存するものにあらず。又た之と相對立するものにあらず。對立すと見ゆるは幻影なり、假設なり。學問研究の便宜上法律と經濟とは分て二となすのみ。其實相を尋れば、經濟組織は内容にして法律制度は外面なり。一を實質と云ひ得可くんば、他は其形態なり。今此外面此形態を具へたるもの卽ち經濟組織なり。外面なく形態なき經濟組織はあらず。既に外なし、何ぞ内あらんや。既に形態の提ぐ可きなし、何ぞ分て實質と云ふものゝ別に存す可きあらんや。從來の經濟學者は外なきの内質なきの態を捕捉せんと努力せり。水中終に月を失ふもの、是れ學者の徒勞なり。

一定の秩序法制の下に立つ經濟組織は、其秩序あり制裁あるによりて、始めて之を社會的經濟生活と名くるなり。此以外經濟組織あるなし。經濟組織に於て其最も捕捉し易き社會生活のあるありて、始めて法制秩序と云ふこと架空ならざるを得。卽ち一度孤立的二界的與件的ならざるに至れる經濟生活は、悉く法制的にして而して必ず社會的なり。孤立經濟と社會經濟との中間第三の境域を存せず。一ならずんば卽ち他、然れば人の天然に於ける技術的に之を支配するか——交涉と云ふを可なりとせんか——技術的ならざる第二の手段によりて之を支配するかの二あるのみ。他の混淆を容れざるなり。卽ち二個の與へられたる一定不動の要件を以ての經濟生活か。又は常に變動——或は向上的或は向下的——して已まざる狀態——關係——にある經濟生活か、吾人の歸屬する所此の二者を出でず。繰返して云ふ、中間の狀態はあらざるなり。第三境は存せざるなり。之を他語に引直せば、技術によらずんば他の第二の手段あるのみ。其間選擇の自由なきなり。社會的經濟生活の極意玆に在り。

四　經濟組織と餘剩價値

技術的ならざる第二の狀態とは何ぞや。予は先づ狀態と云はんと欲す、何んとなれば、二當事者間ならざる道行は、先づ關係ならざる可からざればなり。關係は固より狀態の凡てにあらず。於此乎予は此の第二の或るものが方法にあらざることを告白し得るの地に到着せり。

技術とは前說けるが如く、人が天然と交涉するの方法なり、手段なり。而して此場合に

は此方法此手段が二要素間に存在する凡てなり。此以外何もなし、關係なし、狀態なし。然るに人と人と相渉りて其相渉ることが天然と交渉することゝなるに至るときは、此等の間に存在するものは無數なるに至るなり。何となれば既に人と人と相渉ることあり、其相渉り合ふ『人』の數は限定す可からず、而して此の限定す可からざる數に於て、吾人研究の場面に現はれ來る『人』は皆夫々意志を擔ふものなり。他の語を以つてせんか、人と天然と交渉するときは存在する意志は單位なり。今や人と人と相渉る上にては、此單位は無數に存するものと見ざる可からず。一の單位と他の單位と、其單位は更に他の單位と無限に相交渉し行くに及んでは、予の名けて交渉觸接と云ふもの、實は全然其意義を異にするに至るなり。之を交通と云ふは猶ほ甚だ不足なる言現し方なり。獨語の『ドルヒ・アイン・アンダー』は之れを指すに甚だ妙味あるを覺ゆ。此の『ドルヒ・アイン・アンダー』を名けて予は經濟組織と云ふなり。單位が組織を形成すと云ふは言辭に窮せる予の方便のみ。實は甚だ沒意義に陷れり。

此組織が今日吾人の謂ふ經濟生活なり。經濟單位を名けて特殊經濟と云ふ實は甚だ不可なり。予は屢々此語を使用するも、今に於て其甚だ到らざるを覺ゆ。何故ぞや。特殊經濟と云ひ綜合經濟と云ふが如き、一は具象的にして他は抽象的なる二個の經濟生活は決して存するものにあらざるなり。經濟生活と云ふ一にして凡てならざる可からず。其の一にして凡てなるものは卽ち此處に謂ふ『ドルヒ・アイン・アンダー』の外なきなり。經濟組織是なり。經濟組織の稱亦語弊なきにあらず。然れども經濟單位との對照の便の爲めに假りに許容す可し。實は經濟組織卽ち經濟生活——或は單に經濟——其物にして經濟單位は此『ドルヒ・アイン・アンダー』を引起しつゝある所の——引き起す所のと云ふは過ぎたり——ものゝみ。

今此經濟生活の活動は如何に發動するや。直に天然と相交渉すること孤立生活に於けるが如くなりや。否。若し然りとすれば何か、誰か天然と相交渉し合ふ對手なりや。個々人？所謂經濟單位？否。若し然りとすれば經濟單位と云ふことは全く沒義に落つ可し。若し個々人なれば何ぞ社會的經濟生活あらんや。此問に答ふること甚だ容易に似て容易ならず。其詳細の說明は予之を他の處に於て試みたり。

前段韓國の經濟組織と經濟單位　今は

苦慮錬思は之を經たるものとして論ぜん。

今日の社會的經濟生活は、凡て如何なることなりとも、如何なる目的を有することなりとも、誰が之を發動するとも必ず先づ如上の人と人との『ドルヒ・アイン・アンダー』を通過す。否、此『ドルヒ・アイン・アンダー』を喚起することが其の當面の動機なり。之れを名けて『營利の行爲』と云ふ。『營利の主義』とは其の間に働く法則を云ふなり。而して此『ドルヒ・アイン・アンダー』に基く人類の行動は又天然と交渉するに赤裸々の空手を以つてせず、外面的對下的に前定せられ、社會的に色付けられたる或徑路を通過す。否、天然を導き來て、必ず此徑路上に於て相逢着し、直ちに天然を其居に訪はず。換言すれば、不動なる——不變なる——天然をも、或魔術によりて誘出し、之を動的に發現せしむ——天然其物が動的となるにあらず、其發現を動化するなり——此動的魔術此社會的の徑路とは何ぞや。『カピタリザチョン』（資本化）即ち是なり。今日は土地も亦資本として動化せらる魔術の妙想ふ可し。予がYと名けたるものは即ち此資本化を云ふなり。資本化は——詳細の説明は企業心理論本全集第五集收錄を見よ——今日は悉く貨幣價値に引直して考へらるゝ——貨幣化せらるゝ——によりて、Xは又之を貨幣價値と名くるも可なり。

此資本——貨幣——を通じてするが今日の經濟生活の天然——否人と人との間にも此の傾向は益々擴充せんとす——に對する關係なり、狀態なり。技術にあらざること即ち知る可きのみ。既に技術にあらず。然らば其消極的ならざる節約的ならざる二界的ならざる、與件的ならざる固より多言を須ひず。奚ぞ最小の費最大の効果なる『經濟の本則』のみ支配するあらんや。積極的貨殖的無限的絶對的——ゾムバルトは之を抽象態と名く、言少しく大膽に過ぎたれども其明敏仰ぐ可し——なるは當然なり。『營利の主義』は即ち是なり。而して營利の主義は欲望充足の手段にあらず。人と人との關係に於て Das Mehr を生ぜんと期するものなり。近世經濟生活殊に其劈頭に立つ企業者の最高の職分は、技術的精巧を極むるに存せず、複雜多端千變萬化極りなき人と人との交渉間に於て、克く活潑々地、克く急轉直下、驀直に此活機を制するにあり。商人は生るゝものにして育つ可きものにあらずとは此を云ふなり。而も要は人にありて物に存せず。機は人、人と相觸れ、餘剩、餘剩と相接するの間に存す、其の以前に求む可からず。其以上に尋ね

可きにあらず。名けて投機と云ふも實は作機と云ふの勝れるに若かず。マルクスは此五輿の理を最も早く發見して、而して、此魔術的なる Das Mehr（彼は此を Mehrwert 餘剩價値と名けたり）を咒殺せんと努力し、遂に其身命を捧けて敗れたり。英米の大企業家は實際生活に於て之を究めて其妙處に到達し、以機奪機巧みに之を其藥籠中に收めて近世世界經濟上の急潮を制し了れり。知らず、何人か其形影を併せ捕へ之れを自家學理の系統中に拉し來るものぞ。

右一文三十七年十二月の脫稿にかゝり、當時法政新誌第八卷十二號に揭載せり。而して此の文に於て暗示したる思索は漸く開展して、今や『純經濟學講義』（本全集第一集收錄）の卷となれり。讀者對照一考を加へられんことを請ふ。

二　經濟と經濟行爲との概念に關する誤謬

經濟學の根本概念は曖昧模糊なるもの甚だ多し。或は是を以て經濟學の研究に從事するものゝ推理構思の力に乏しきもの多數なるに歸する者あり、必ずしも然らずとは言ひ難し。或は近來社會問題勞働政策等に關し慷慨悲憤の感情を滿足するに過ぎざる卑近なる論議の流行し、將來に對する理想、現在に於ける政策等の問題にのみ潛心し、嚴密なる理論上の修鍊と綿密なる實際生活の解剖とを忽にする者多きに原因を求むるものあり、必ずしも如此事情なしとは斷ず可からず。或は近來歷史的研究方法の盛を極むるの極、一知半解の徒相率て零碎的なる部分調査あるを知て、時に全體に涉りて綜觀考察を下すの用意を缺き、徒らに精緻煩鎖を其自らの爲に喜び、系統なく秩序を紊るも、材料豐富ならば以て萬事に代はるに足り、之れを咀嚼し之れを消化し、克く其間に一貫せる脈絡を尋ぬるが如き熱心は却て無用視し、或は又た哲學的研究を主とすと稱して、其の實不得要領の言辭を弄して深遠を衒ひ、晦澁不明確なる思想を喜んで透徹明確を目するに淺薄を以てすること、一部學者の間に風をなせるが爲めなりと云ふものあり、必ずしも如此誤解者の存するを否定することは能はず。然り、然りと雖も、此等は皆表面の現象のみ根本の病

餘其物にはあらず、實は曖昧模糊たる根本の思想の生ぜる結果たるものにして、其原因と云ふ可からざるものなり。眞正の病弊は猶ほ深く根柢に存す。

◎經濟學今日の急務は能く自ら退て反省し、如此曖昧模糊を以て特色とし、不精確不透明なる頭腦のみ能く經濟學に從事するを得可しとの感想の依て出づる所を極めて、自家の立脚地を確定するにあり。若し然らずば、方今の世紛糾錯綜せる幾多實際生活の活問題は到底之を解決するの見込なきなり。而して其之をなさんとする、經濟學の根本概念に關し一々之が由來を繹ね、何故に今日に於るが如く實際生活と全然相背馳するに至れるかを知るは、此根本概念をして再び實際生活に於けるものとす毫も相戻るなからしむるに不可缺前提なり。蓋し何れの科學と雖も、其概念を劃定し其用語の意義を定むるに方りては、多少は實際生活に於けるより、或は其內容を廣狹し、或は其適用を伸縮するが如きは不得止處に屬す。然れども經濟學に至りては獨り此れに止まらず濫用曲解遂には實際生活に於けると、意義の上に於ても、語法の上に於ても、何等の關係なき概念と用語とを混用するが如きは、他に其類例を見ざるなり。（富・資本・土地・勞働・價値・市價・地代・利子・賃銀等の用語皆然り。）而して如此

學術上の概念の實際生活と相扞格するに至れるは、一に歷史的理由より來り經濟學の初期に於ける『フキジオクラット』の機械的自然觀が生み成せる處のものを、更らに助長したるが爲ならずんばあらず。乃ち一見閑事業に似たる經濟學史の研究が、其實學理開展の上に多大の影響を有す可き所以茲にあり。蓋し經濟學の根本概念の曖昧模糊たる所以を明にし、之れを匡し之れを改めて、實際生活に合致せしめんとするには、唯に現在に於る所說の範圍に止めては到底一步をだも向上せしむること難し。何んとなれば、先づ其根本の出立點の那邊に存し、又た存せざる可からざるやを明確にしたるの後にあらざれば、喧々擾々の爭は暗中の角闘に過ぎざればなり。一度史的研究が與ふる光明を以て此暗黑裡を照さば、實は其爭ひの甚だ無益なりしを發見す可し。經濟生活に於ける凡ての現象の幾千年の史的發展を經て、吾人が現在見るが如きものとなれるが如く、經濟生活の現象に對する學理的概念も、亦た幾多の年月の間に漸次發展して以て今日に至れるものにして、決して偶然に發生したるにあらず。又た學者個々の私見によりて成る可きものにあらざるなり。然るに今の世に經濟學を論ずるもの、多く定義分類の末に拘泥し、自

己の願望に適當す可き意義を擅に定めて、之れを學理的の定義なりとし、之れよりして援引し來れる幾多の種類を陳列して、以て經濟現象の說明了れりとなす。價値を說くては其使用交換の二種あるを云ひ資本を論じては固定流通の區別を施こし、貨幣の何たるやを知らしめんには、徒らに之れが職分と稱するものを平面的に陳列して、以て學理の研究盡きたりとなすは、恰も水に海水あり、河水あり、湖水ありとの區別をのみ示して、以て水の何たり、如何なる要をなすやを說き得たりとなすに等し。此分類、區別にして實際生活に存在するものと合致すれば猶ほ可なり。〻定義既に任意の私見より出づ、其分類の如き多くは架空の構成の結果たらざるはなし。今此の碎斷的平面的の研究法を捨てゝ、精密公平の史的研究を以てするは、學問の進歩の爲めには一日も忽かせにす可からざることなり。凡ての經濟學說は之れを立方的階段に置て、始めて夫々相對的の意義を發揮し、幾多の相衝突せる如く見ゆる學說の間亦た一條の眞理の必ず適從せざる可からざるものあるを認むるを得可きなり。

近世の經濟學、其標榜する處は甚だ嶄新なるが如く、學者が斯學の定義として揭ぐる處のものは、極めて高尙なるが如しと雖も、其實に於ては『フヰジオクラット』に至りて大成せる自然的技術的の思想を出立點とし、今日に至るも猶ほ之を脫却する能はざるなり。今此『フヰジオクラット』學者は、複雜なる經濟現象を律するに、悉く自然的の見解を以てし、寸毫も經濟生活の有機的現象に注意を拂ふことなし。彼等の經濟社會を見る尙ほ機械の甚だ複雜なるものに對すると全然同一の感想を以てし、人類個々の有意活動を以て、原因結果の大則のみによりて支配せらるゝこと、外界の自然現象と少しも異ならざるものなりとす。經濟行爲を以て目的活動 Zweckhandlung となし、經濟が此活動に對しては順應系統の組織の地位を有することを認むるに及ばず。二者を以て全然同一物に對する異稱たるに過ぎずとなす。自然的の動と反動と相選ぶ所なき經濟上活動の究極の原因は、自利自己の念と稱するものにして、之に驅られて本能的機械的に發動し、自利の欲望を充たさんとする行動は、卽ち經濟行爲なりとなす。故に經濟とは必ず確定不易時と所と人と國とによりて二三ある可きものにあらずとなすなり。彼等の立脚地は一見近世の一元觀に似たる所ありと雖も實は甚だ然らず。近世の一元觀は、決して自然の動作と自

由意志の動機とを一律に劃するにはあらず。自然界に於ける原因と目的行動の動機との二者の儼然として存することは之れを認むるなり。故に經濟行動を以つて目的行動となし、經濟上百般の現象を以つて自由意志の動機より出でゝ一定の結果を望むが爲めに起るものとはなすなり。然れども此目的行動も、要するに順應の活動たるに外ならざるの理を認むるに於て終局一元に歸すとなすなり。『フキジオクラット』幷に之れを祖述する經濟學者は、之れに反し、二者を以て始めより全然同一物と看做すなり。故に彼等は經濟生活に動態あるを知るのみにして、其の有機的生活の靜態を全く閑却し、其構造其器官其組織等の動態の順應基礎たる可きものゝ研究を輕視するなり。是れ彼等の經濟と經濟行爲とを少しも區別することなく、全然同義語として使用し、經濟を以て活動若くは活動の合計なりと定義して顧みざる所以なり。此一事單に用語の不確定の一事例に過ぎざるが如くならんも實は決して然らず。既に經濟を以て活動若くは活動の合計なりとなす彼等は、『經濟』が一の組織を意味し、順應の基礎と活動とを包有するものなるを悟るに及ばざるなり。彼等は經濟なる語の希臘語の Oikos Nomos の二語より援來

するを說く。既に『ノモス』即ち秩序たらば、靜態の意に解せざる可からず。如何にして之が動態若くは活動の合計と稱せらる可きや。『國民經濟』『國家經濟』等の用語は彼等の使用して憚らざる所なり。秩序組織ならずして活動の合計たるものを國民又は國家經濟と云ふは修辭上既に許容せられざる成語なり。況んや彼等の此等の成語を用ゆる、國民の經濟組織、國家の經濟組織の義に於てするの外なきに於てをや。彼等と雖も國民經濟を以て國民の經濟行爲の單純なる合計となすにあらず。彼等は到底自家撞着の謗を辭する能はざるものと云はざる可からず。彼の統計家が道德統計と意志の自由との關係に關し、論究頗ぶる勉むるものありて、尙ほ今日に到る迄何等の敬服を値す可き學說を生ぜざる、其病患を這箇經濟學者と共同に有するものなり。

經濟學者の此の隻眼的一元觀は、自然の結構に成る機械たるに於て、他の機械と少しも異ならざる經濟生活に對しては、機械たる構造に關して、定義分類を施こすのみ。之れを以て有機的生活となし、其器官其組織を研究するが如きは全く想到せざる處なり。唯だ與へられたる機械其物が如何に動くや、動きて得たる結果は如何に交換せられ、如何に分

配せられ、如何に消費せらるゝやを知るを要するのみにして、主として結果其物、手段其物に重きを置き、此結果の生ずる所以の根本を顧みず。卽ち組織として、秩序的系統としての經濟は、寸毫も之れを研究することなく、唯だ其發現の活動たる經濟行爲をのみ研究し、之れを以て經濟と全然同一物なりとなすに至れり。經濟學は人類の欲望充足の活動と、其結果たり其目的たる富とを以て唯一の研究の對象とし、之れが動機たり、原因たるものに關しては、唯自利自己の念なるものを認むるのみ。彼等の富を見る、手段としてにあらずして目的としてなり。故に此以上の目的あることを認めず。人は唯富を求めて活動するものにして、經濟學とは此活動の經過を研究するものなりとなすなり。於茲彼等の說く學理は實際生活と甚だ相距り、其眞相を捕捉し得ざるものゝみにして、經濟學の用語は日常生活に慣用せるものとは全く異なれる意義を有するに至れり。一二の例證をあげんか、彼等は資本を定義して、過去生産の成果にして將來の生産の用に供せらるゝものとす。而して彼等の所謂生産とは、始めは純然『フヰジオクラット』的眞象的の富を作り出すことを意味せしも、かくては到底架空的に構成せられたる經濟現象をも說明し得ざるにより、漸次其意義を擴張して利用（或は價値）を生ずることを生産とすと云ふに至れり。然るに利用（又は價値）の發生增加は、卽ち生産なるが故に、物の利用を增すの結果として成り、物の利用を增進するが爲めに使用せらるゝもの外は資本にあらざることゝなる。於茲乎實際生活に於て、誰人も資本としてすら毫も怪まざるもの多くが、經濟學に於ては資本たらざることゝなる。之れを例せば、資本の借受者が其資本を娛樂の爲めに費消せば、少しも利用を生ぜざるを以て不生産的信用たり。卽ち此場合に貸付けたる資本は、經濟學上に於ては資本にはあらざるなり。軍事公債を買入るゝもの如き、經濟學は又た之れを以て資本を拔下したるものとせざるを要するなり。彼等は又勞働を定義して、利用を生じ出す生産の爲めに心身を勞することなりと云ふ。勞働のみが利用（餘剩價値）を生ずるものなりとの論は、此の勞働の定義を反覆せしに過ぎずして、一正しければ他また正しからざる可からず。然り經濟學者にして其の定義に忠ならんか、遂にマルクスと同一の結論に到達するの外なかる可きなり。然れども實際生活に於ては、勞働とは利用卽ち餘剩價値を生ずる心身の勞役を云ふにあらず。故に凡ての餘剩價

値は勞働の生ずる處なりと云ふ能はず。然るにマルクス並に其祖述者は、其學理を以て直ちに實際生活の勞働と混合し、學理的の意義にて云ふ勞働とは、凡て餘剩價値を生ずる心身の勞を云ひ從て凡ての餘剩價値は勞働に歸す可きものなりと做す。之れを實際に就て云へば、凡ての生産の收益は勞働者（此場合には彼等の所謂學理上の勞働者の中に算入せらるる可き企業者を含まず實際生活に於て勞働者と稱するもの）のみを指す。の所有に歸すべきものなりと結論するなり。卽ち此くの如くんば、企業とは凡ての生産の收益を起す力なり、故に生産の收益は此の企業に歸す可く、勞働者は毫も之れに預る可きものにあらずとの學理的の主張を立つる人あるも、必ずしも之れを非難し能はざるに至る可し。已れの爾かくあらんことを希望する所を以て定義となし、さて定義かくの如ければ實際に於ても亦た此くの如くならざる可からざる可しと云ふは、世の傀儡師のなす所と全く相同じ。彼等は其函中より或は佛、或は鬼、手に任せて逸出せしむと雖も、こは皆其始に豫め入れ置きたるものなり。識見不透徹の輩卽ち見て以て奇となすのみ。經濟學者の定義、分類は概ね此類なり。彼の『租稅とは所得財産の分配を公平にす可きものなり』との自己の願望を名けて租稅の定義となし、定義此くの如くなれば、租稅政策は又た財産所得の分配を公平にするを勉めざる可からずと云ふは、宛然たる傀儡師の所爲にして、客觀的の學理討究とは相遠きものなり。勞働は利用を發生する生産を營むが爲めに心身を勞することならば、經濟行爲に從事するものは皆然らずや。然るに實際生活に於て勞働と云ひ勞働者と呼ぶものは、如此の類を云ふにあらず。官吏、敎師を以て勞働者なりと云ふものあり。然らば官吏敎師に關する問題は勞働問題にして、勞働保護とは此等の階級を含むものなりや。實際生活に於ては如此疑問の起る餘地なし。曖昧なる經濟學の上に於ては之れに反す。特定の勞働者階級ありて其營む所を勞働と云ひ、其之れが報酬として受くる所のものを勞銀とは云ひ、此特殊の階級に關する問題をのみ勞働問題とは云ふなり。然るに經濟學者の自家撞着は獨り此れに止まらず、彼等は勞働に生産的と不生産的との區別を下す。勞働は生産を幇助することを云ふならば、不生産的勞働とは勞働にはあらざる可きなり。たとへば家內勤勞の如きは、彼等に從へば生産的勞働にあらず。而して勞銀とは生産補助の割合に對する報酬なり。されば家內勤勞の如きは、經濟學上にては勞銀を受くるの理なきものとせざる可からず。是

れ豈に滑稽事にあらずや。

以上は一二の事例に過ぎずと雖も、經濟學の全體に渉りて之れを例證する極めて易々たるのみ。然れども區々細末の誤謬は其本源を匡せば直ちに之れを取除くことを得。『生産』『交換』『分配』『消費』と區別するが既に本源の誤謬なり。米穀を耕種する農夫も、之れを交換賣買する商人も、之れを調理割烹する家婢も、共に均しく其利用を增進するものなり。然るに商人は生産を營むものにあらずして、交換と稱する別種の行動に從事するものとせらる。家内に於て米穀の調理に從事するは獨り生産にあらざるのみか、却て其反對なる消費なりとせらる。然れども調理割烹せずしては米穀は人間の欲望を充足すること能はず。卽ち家内薪水の勞は其利用を甚しく增進するの行爲にあらずして何ぞや。——況んや之れを營業とする割烹業に於てをや——否之れのみならず、飲食の行爲其物も或は咀嚼或は消化するは何の爲なるや。米穀を以て人間生活の欲望に充つ可き最後の形態に持來たす所以に外ならざるなり。如何に品質良好の米穀の豐富に存在するありと雖も、人間に咀嚼消化の力なきときは、此米穀は其欲望を充足する能はずして、何等の利用をも生ぜざるなり。故に此の最後の行動こそ全體の利用を發動せしむるに、最も有力なる利用增進の行爲となさゞる可からず。然るに實際の生活に於て、人の飲食の行爲を生産と呼ぶものはあらず。然れども經濟學者若し眞面目に其所說に忠らんか、須らく實際生活に要求して其用語法を改正せしむ可きなり。唯彼等の眞面目ならざる事玆に出でずと雖も、理は卽ち正に然らざる可からざる者なり。近來に至り實際生活に確定の意義ある用語を濫用するの弊殊に助長せり。經濟上の用語に賃子（レント）なる語あり。他人の所有物を賃貸するに對する報酬を指す語なり。其所有權の目的物の土地なると動産なるとは問はざるなり。而も其一種なる地代に關し、リカルドの地代說と稱する一種の學說ありて、『レント』の依て生ずるは地質の良否に差等あるより來ると說て以來、『レント』とは良否其他差等あるものに對して支拂ふ報酬の義に解せられてありき。然るに近來消費者賃子なる語を用ゐるものあり。其意は消費者が物品を購入する時は、其支拂ふ代價よりは、買入れたる財貨の利用多かる可し、此二者間の差額を消費者剩餘又は消費者賃子と云ふとなすなり。此說は理論として誤謬たるは勿論——

消費者のみ餘剩を得るにあらず、生産者も商人も共に此賣買より餘剩の利用を得るにあらざれば、誰人も賣買に從事するものにあらず――極めて不用意の用語なり。既に賃子と云へば拂渡さるゝ報酬を意味す。既に拂渡さるれば何ぞ餘剩あらん。餘剩ありとも拂渡されずば賃子とは云ふ可からず。見る可し何れの意味に於ても到底濫用曲解たるを免る可からざることを。如此經濟學の用語は全然實際生活に於けるに異り、其の概念は一も實際生活の其れと合致する所なく、曖昧模糊と支離滅裂とを特色とするに到れるは、皆『フヰジオクラット』殊にケネーの機械的技術的自然觀の胎せる害毒にあらざるはなし。

今河上學士　國家學會雜誌第百九十九號所載の文　が引用せられたる本邦諸家の所論を見るに、又た皆根本に於て西歐の學說より獨立すること尠く、機械的技術的自然觀に桎梏せらるゝもの甚しきを見るなり。經濟と經濟行爲、順應の組織と其の活動とを寸毫も區別せざる事一の誤謬なり。經濟上の財貨と其然らざるものとを區別するなく、欲望充足の全體を以て經濟なりとなす事二の誤謬なり。而して全然此二の誤謬のみを以て成立し、些の制限を加

ふるものなき經濟の概念は未だ多く見ざる所なり。然れども河上學士の引用せる次の定義は卽ち之に近し。曰く、『經濟とは吾人生活の欲望を充さんが爲めの活動を言ふ』松崎氏『經濟學要義』と、此の定義は包含最も廣汎なる丈け誤謬亦た最も大なり。漠然捕捉し難きが如くにして實は全體が誤謬なるに於て之れを捕捉すること極めて容易なるなり。然れども經濟と經濟行爲とを區別せざるは透徹精錬の思想を以てして猶ほ免るゝ能はず。河上君の引用せる如く、金井博士の如きすらも亦た遂に此間の區別に論及せられず。否、シュモラー、ワグナーの如き先進すら又た然るに於てをや。河上學士の如き亦た錬思半にして止み此に到らず。況んや其他の透徹精錬を缺くものに於てをや。必ずしも此定義に特有なるものと云ふ可からず。然れども欲望充足の全體を以て經濟行爲なりとするに至ては、他に匹儔を見ざる不精確の思想なり。『フヰジオクラット』より今日の奥太利學者に至る迄曖昧模糊を喜ぶ者其人に乏しからず、而も欲望充足を以て制限なく直ちに經濟と同義なりと放言して恥づる處を知らざるものに至ては、適當なる意味に於ける經濟學者中未だ之れあるを見ず。マンチエスター學派の粗笨放膽唯一條自由競爭の理

以て天下萬般の現象皆解く可しと信ぜる亞流にありても、猶ほ經濟とは最小の勞費を以て最大の結果を收めて欲望を充たすことなりとなし、之れを以て經濟の本旨なりとなせるなり。欲望充足の全體が經濟ならば、人生社會の現象は悉く之れ經濟にして經濟學とは人生其物を研究するものとなる可きなり。人をして適從する所に苦ましむるに妙を得たりとの評（メンガー參照）あるシュモラーすら次の如く曰く

Der ganze Umkreis menschlicher Gefühle, der niedrigen wie der höheren, erzeugt so Bedürfnisse. Der Mensch hat sinnliche, ästhetische, intellektuelle, moralische Bedürfnisse. Aber mit Vorliebe gebraucht unsere Sprache das Wort für die Notwendigkeit, durch den *wirtschaftlichen* Apparat von Gütern und Diensten den niedrigen wie den höheren Gefühlen die gewohnte Auslösung zu verschaffen. Die Bedürfnisbefriedigung, hat man darum gesagt, ist das Ziel aller Wirtschaft; die Bedürfnisse hat man als den Ausgangspunkt alles wirtschaftlichen Handelns und aller wirtschaftlichen Produktion hingestellt, was, ganz richtig ist, wenn man das Wort Bedürfnis in diesen engeren Sinne nimmt. Denn im weiteren Sinne ist Bedürfnisbefriedigung der Zweck alles menschlichen Handelns, nicht bloss des wirtschaftlichen, denn zu allem Handeln geben Lust- und Unlustgefühle und die Erinnerung an sie den Anstoss.—Grundriss. S. 23.

欲望充足の全體を以て經濟なりと說くものは、經濟學者の經濟學あるを知て、他に欲望を研究する心理倫理の學あるを知らざるものなり。否欲望なる用語の確定の意義の經濟學の定むる處にあらずして、心理學倫理學の定むる所たる可きを思はざるなり。人生には經濟上の欲望あるのみ、其他の欲望なし、人間の活動するは唯だ經濟上の目的のみに向て爲すものにして、其他の目的の爲めに活動することなしとなすに均しきものなり。シュモラーの云ふ如く、人生百般の行動は悉く欲望より生じ、欲望充足は人生の全部を成すものなるの理を全く知らざるか、又は此百般の行動は要するに悉く經濟上の『ヒンテルグルンド』を有するものとなすなり。前者ならば無學淺識滑稽に近き見解と云はざるべからず。後者ならば人生を見る如此偏倚極端の見を以てする、到底近世の倫理思想に合せざるものとせざる可からず。或は論じて曰く、凡そ定義は簡單を尙ぶ、故に正に附す可き制限の如き凡て之れを省く可しと。若し然らば寧ろ始めより有害無用の恐ある

定義は之を與へざるに若かず。含有す可き正確なる概念を表はすに足らざる定義は寸毫の効なきのみならず却て人を過るの虞あり。眞面目に學術の研究に從事するものゝ斷乎として排斥せざる可からざる所なり。蓋し方今經濟學の曖昧模糊の甚しきものある歎ず可しと雖も學に此に從ふ者、勉めて晦澁の論議を排し經濟學根本の病弊の何たるを知り、之れを除却するに銳意せば、庶幾くは族幟の鮮明を來たす必しも爲し難きにはあらず。獨り彼の哲理的研究を喜ぶと稱し、實は平々凡々の常識を列ぬるに晦澁の言辭、不透徹の論理を以てして、稍々明確ならんとする思想を却て曖昧模糊に陷らしむるが如き傾向は、誠に斯學の進歩の上に於て最大の障碍を與ふるものと言はざる可からざるなり。

然れども經濟學者の如此幼稚淺薄なる論議を喜びしは既に數十年の昔に屬す。全然機械的技術的のケネー一流の論議を以て、純理研究上今日猶ほ重大の價値ありとなすものは、正當の意味にて言ふ經濟學者中には一人も之れあるなし。今日の經濟學者は欲望充足の全體を以て經濟となすものなく、皆勉めて此欲望充足が如何なる狀態の下に於て行はるゝときと之れを經濟上の現象と看做し、之れを經濟學研究の對象となす可きやを論究するなり。其内最も流行するは欲望充足が『經濟の本則』によりて支配せられ、最小の勞費を以て最大の効果を收めんとするとき然りとなす之れなり。故に或は最小の勞費を以て最大の結果を收めんとすること其自身が、卽ち經濟なりとなすものあるに到る。正統學派の大多數は皆爾か說くなり。シュモラーの所說亦多く其上に出でず。曰く、

Und in all' dem erscheint uns als wirtschaftlich nur die zweckmässige, von gewissen technischen Kenntnissen, von klarer Ueberlegung und moralischen Ideen geleitete Thätigkeit; eine solche, welche durch Wertgefühle und Werturteile gelenkt ist, d. h. durch vernünftige Vorstellungen ueber die wirtschaftlichen (?!) Zwecke und Mittel, ihre Beziehungen aufeinander und auf Nutzen und Schaden, auf Lust und Leid für den Menschen.—Grundriss. I. 7-10. Taus. S. 2.

と。經濟上の目的と手段と其交互の關係に關する合理的の考察によりて支配せらるゝ行爲を經濟と云ふと說明するは、婉曲滑脫能く其難所を塗擦し去ること、雨ふる天氣を雨天と云ふと答ふるに等しと雖も、氏が『經濟の本則』に依りて支配せらるゝ行動にあらざれば經濟行動となさゞるの意は卽ち明なり。明確詳密を尙ぶワグナーも亦た此說を

採るものなり。曰く、

Der Inbegriff der auf fortgesetzte Beschaffung und Verwendung von Gütern zur Bedürfnissbefriedigung gerichteten, planvoll nach diesem ökonomischen Princip erfolgenden Arbeitsthätigkeiten in einem geschlossenen oder als geschlossen gedachten menschlichen Bedürfniss-und Befriedigungskreise ist (im allgemeinsten Sinne des Worts) die Wirtschaft; jede einzelne hierzu gehörige Thätigkeit ist eine wirtschaftliche, ökonomische Handlung, jede einzelne bezügliche Erscheinung ist eine wirtschaftliche Erscheinung—Grundlegung. I. 3. A. S. 81.

河上學士の引用せられたる金井博士の定義なるものは、此ワグナーの定義に最も近きものにして、經濟主義（本則）の支配するにあらざれば、たとへ欲望充足の爲めにするも、その は經濟行爲にあらずとするもの、如し。此シュモラー、ワグナー、金井博士幷に方今最も進歩せる經濟學者の多數の取る所の定義は、之れを欲望充足の全體を以て經濟行動なりとなすものに比しては、數段の進歩を示すものと云はざる可からず。ワグナーが前掲書第八十頁に論ずる如く、經濟行爲は現今にありては此主義本則によりて支配せらるゝこと最も多きなり。然れども元と此の經濟の主義又は本則となす最小の勞費を以て最大の効果を收めんとすることは、今日の世決して獨り經濟行爲に限りて行はるゝ主義本則に非ず。苟くも合理的計算的の行動たらば、事經濟上に涉ると否とを問はず、悉く此主義によりて支配せらるゝは、十九世紀の合理的社會にありて一般普通の事なり。（予は此合理主義の經濟上に於ける發達の叙述、合理的人世觀、予の名けて貸借的世界觀となす處のもの、企業心理論に於て試みたり）起らざる以前は經濟行爲と雖も決して如此主義に依て支配せられざりしなり。今日と雖も營利交通經濟の最も進歩したる處に於てのみ此主義は完全に行はれ、之に遠ざかりて自足經濟に近くに從ひ、又た漸く此主義の影響に遠ざかるを見る可し。而して又た今日の進歩せる交通經濟にありても、經濟行爲は必ず此主義に支配せられたるものならざる可からざるの理なく、此主義に支配せらるゝもの、又た皆經濟行爲なりとは言ひ難し。吾人の娯樂に於ける、文藝學術に於ける、倫理道德の上に於ける、何れか其收む可き一定の効果は、要する所の犧牲の少きを以て上乘とせざるものあらんや。甲の地より乙の地に赴く、通常の場合に於ては、其經濟主の目的より出づると、物見遊山の爲めにするとを問はず、必ず道路の最も平

坦にして距離の最も近き處を行くを期せざるはなし。但し特別の事情あるときは、却て迂回を妙とすることあらん。經濟上に於ても亦た特別の事情あらば、必ずしも一定の結果を收むるの勞費最小ならざるも厭ふ處にあらず。乃ち知る近世の經濟生活にありては、經濟行爲は此最小の費最大の報の主義によりて影響支配せらるゝを常となすと雖も、之れによりて影響支配せられざれば經濟行爲にあらず、之れに影響支配せらるゝものは、必ず經濟行爲なりとは到底言ふ可からざる事なるを。故に此主義を名けて特に經濟主義となし、之れを唯一の標準として、經濟と經濟ならざるものとを分たんとするは、未だ堂奥に上らざるの論と云はざる可からざるなり。唯近世經濟生活の進歩するに伴ひ、欲望は分量幷に質の上に於て著しく增進せるに、之れを充足すべき手段、並に土地の量限りありて、放擲し置きては十分の欲望充足は得て期す可からず、卽ち多々益々辨じて最小の勞費を以て最大の効果を收め節約利用を主眼とすること、經濟行動の最大要務たるに到りしが故に、錄思透徹せざるものが、直ちに之れを誤り傳へて、經濟行動とは常に如此主義によりて支配せられ、離齪汲々唯々及ばざらんことを惟れ恐るゝを以て事となすものなりとするに到れるものにして、今日より之れを見れば未だ俄かに咎むるに足らざるなり。

欲望充足の全體を以て經濟となさずして、之れに制限を附するものが普通取る第二の要件は、其充足の用に供す可きものが經濟上の財貨たる可きを要求すること之なり。前掲シユモラーの說明然り。經濟の說明に經濟上の財貨を云々するは、論理の貫徹を以て許す可からずと雖も、其意は經濟行爲と其然らざるものと分つは、欲望充足と然らざるとによれるにはあらず同じく欲望を充足せんとの意志を以てする目的行爲の內、特定して經濟的と稱せらる可きものは、之れを充たすに經濟的と稱する特定の條件の下にある時のみを指すとの意ならば、首肯し得られざるにあらず。而して其經濟的と稱する特定の條件とは何ぞや。從來經濟學者の此疑問に答ふ可く提供せる條件に二あり、或は併立すとなし或は一必ず他を排すとなす。卽ち勞働を費やしたるものなること其一なり。存在量有限なること其二なり。前者は如此財貨の經濟上に於ける重要、卽ち價値の最低限を定め、後者は其の最高限を示めすものとせらる。金井博士も亦社會經濟學に云て曰く『經濟上の財貨とは吾人々類を圍繞する外界の特に區劃されたる一部分にして人爲に

依り人々の欲望を滿たすに適當なる形態を得、又は之に適當なる地位に置かれ、而して後始めて財貨たるの性質（利用？價値？）を得るか、或は斯くして財貨たるの性質に增加さるゝ所あるものを云ふ……何れの經濟上の財貨も皆多少の勞力を要するの點に於ては相一致す、此の理由と有限の性質を有するとよりして、經濟上の財貨は不法に之を獲得する場合の外常に自ら勞働するか或は他に報酬を與ふるか、然らざれば他人より無代價にて讓與さるゝに非らざれば決して之れを得可からざるなり』（七六頁）と。然れども勞力を費やせるものにして經濟上の財貨たらざるものあり、勞力を費やさゞるものにして經濟上の財貨たるものあり。人々の學術上審美上の欲望を充たす可く、巨多の勞働者を使役して建設せる學校圖書館美術館の類は經濟上の財貨にはあらず。反之少しも勞働を施こすことなきも、原野田地を所有するものにありては、此原野田地は經濟上の財貨たるなり。勞力を費し人の讀書の欲望を充たすべく著述に從事する事は經濟行爲にあらず。而して其著述も出版せられ市上に賣買せらるゝにあらざれば經濟上の財貨たらざるなり。有限無限の別も亦た經濟的の財貨と其然らざるものとの區別を說明するに足らざるなり。高山にのみ發育する草花は、何れの意味より云ふも最も有限のものなる可し。然れども植物學者が非常の勞役と苦心の結果高山に攀て珍奇の草花を採取することは、決して經濟行爲にあらず、此の採取せられたる草花も、亦た學術研究上非常に學者の欲望を充たす者なりと雖も、學者の用に供せらるゝ時は、決して經濟上の財貨にはあらざるなり。反之無限充溢に存在する野草路花も、若し花商之れを採取し、之を市中に賣て生計の資に充てば、こは必ず經濟行爲にして、此時の草花は經濟上の財貨たる可し。如此欲望充足に供せらるゝ財貨の方面より見て、經濟行爲の概念を限定せんとするは決して不可ならずと雖も、勞働并に稀少利用の說明にては到底其用を爲さゞるを見る可し。蓋し從來の經濟學は英派にては富と云ひ、獨派にては財貨と云ふも、共に此くの如き特定の形態を確定不動に具備する物品の世上にありて經濟上の現象とは、悉く此財又は富なる特定物の『生產』『交換』『分配』『消費』の四の何れかに切り盛らる可き者となせり。故に經濟上の現象複雜を極むるに從ひ、漸次此富と云ひ財と云ふ者の意義を擴張せざる可からざるに到れり。蓋し若し然せずんば、重要なる經濟上の現象にして

說明し得られざる者多數なる可ければなり。於茲財と云ふときは、內界の財も含み、勤勞權利關係等亦た皆財中に算入せらるゝに至りて頗ぶる混雜紛亂を極む。然れども彼等の立脚地に立て、凡ての經濟現象を必ず悉く財其物の云爲のみに歸　可き者とする以上は、財の內容は正に如此廣汎なるを要するは疑を容れざるなり。卽ち財の概念を論究せんとするにも、亦た先づ經濟的てふ形容詞を冠す可き特定の種類を定む可きものゝ何なりやを、豫じめ確定したる後ならざる可からざるの理明ならん。ヘルマンは夙に此間の消息を道破せること次の如し、

Die Wirtschaftslehre hat es nicht mit den Gütern an sich zu thun, nicht, wie oft gesagt worden, mit der Herstellung, Vertheilung und dem Verbrauche der Güter. Diese Geschäfte sind Sache des Bergbaus, des Landbaus, der Industrie, des Handels, der häuslichen Sorge der Familie, der Veranstaltungen für die Lösung gemeinschaftlicher Lebensaufgaben. Sie fasst in der Technik wie bei der Bedürfnissbefriedigung alle Güter nur als menschliche Leistungen und Besitzstücke, als Inbegriff von Arbeit und Vermögen auf, welche sie im Gebrauchswerth und Tauschwert auf Grössen gleicher Einheit reducirt, um vergleichbar zu machen, was der Mensch in dieselben an eigener Aufopferung gelegt hab. Sie beschäftigt sich nur mit diesen quantitativen Wertverhältnissen, um überall das zur Herstellung der Güter erforderliche Mass der Aufopferung an Arbeit und Vermögen zu bestimmen, den gegebenen Mitteln anzupassen und für die vorgesteckten Zwecke möglichst wirksam zu machen. Sie sieht ab von den tausendfältigen qualitativen Verschiedenheiten, betrachtet die Güter als gleichartige Quantitäten und zeigt, wie in diesen über die Verwendung der Mittel zum Leben, für die Zwecke des Lebens Rechnung geführt wird: sie ist die Grössenlehre der Güter.—Staatswirtschaftliche Untersuchungen. 2. A. 1870. Parag. 32. S. 67-8

以上は從來の進步せる凡ての經濟學者が、經濟經濟行爲の概念を其然らざるものと區別せんが爲め提供せる制限の重なるものにして、金井博士が之れを採用せるは堅固なる憑據あるによるなり。河上學士が『之れ甚だ矛盾の見解なり』と云へるは其當を得たりと雖も、金井博士自身が此矛盾の見解を持するものと見るは誤なり。金井博士によりて代表せられたる今日迄の最も進步せる經濟學者の所論は、皆此の甚だ矛盾せる見解を

含むものなり。金井博士は殆んど自ら所期せずして、此の矛盾の見解を含める從來の經濟學者の所說に遙かに一頭地を拔く可き說明を下せる處あり。博士曰く『經濟上の財貨は通常外界の區劃されたる一部分にして、吾人々類が資本を投じ若くは勞力を費やせば自由に左右し若しくは利用し得るものたらざる可からず、之を換言すれば則ち通常一個人の所有權の範圍內に屬す可きものたらざる可からず』（社會經濟學七五頁）と。唯博士が鍊思半にして已み、此に論ずる處を更らに論究して、遂に從來經濟學者の定論に基ける經濟の概念を打破し、一新見解を立つるの段に到らざるは惜む可しとするも、猶ほ博士の所論は今日迄の西歐學者の論究の最高段を代表するものなることは否定することを得ざるなり。

今河上學士の新說を見るに、學士は　一　人が自己の缺乏の感覺を除去するの　二　意志を以て　三　外界の物質を　四　占取し又は之に變化を加ふるを　五　目的とする行爲を以て、經濟又は經濟的活動となす。學士が經濟行動を以て　二　自由意志より出づる行動なりと斷じて、其自然的、機械的本能動作に非ざる所以を明かにせるは、予の所說に全然合致する所にして、學士が獨立の思索玆に到達せられたるは最も敬服せざる能はざる所なり。從て學士は經濟行動を以て　六　目的行動 Zweckhandlung なりとの結論を得られたるは、如何に其思想の一貫透徹せるやを證するものなり。又經濟行爲の對象たる財貨の　三　外界に限りて內界の財若くは勤勞權利關係等を財に算入せざる亦た最も稱揚に價す。而して經濟行爲の主として行はるゝは、此等財貨を　四　占取又は變化を加ふることなりとせるは、金井博士が最後に到達せる思想に近くして、最も多く予が所論に合するものなり。反之　一　自己缺乏の感覺の除去を經濟行爲の動機とするは中らず。商人の物品を賣買するは、之れによりて自己缺乏の感覺を除却する爲めにはあらず。勞働者が食料品衣料の工場にて勞役するは、其變化加工の目的は直ちに之れを以て自己缺乏感覺の除去に供せんが爲めにはあらず。今日の市場生產時代にありては、其生產品は何れの時、何れの處、何れの人の缺乏感覺の除去に充てらる可きやを知らざるを常とす。商人や勞働者は其經濟行爲の報酬として入り來る所得（利潤又は勞銀）を以て、始めて其欲望充足――缺乏感覺の除去なる新語は欲望充足なる陳言に若かず――に

供するを得るなり。其賣買し又製作する生產品を以て、直ちに自己欲望感覺の除去に充てざるが、今日の國民經濟の特徵なるなり。河上君云ふ所は自足經濟時代にのみ適用す可き處なり。三　物質一般を以て財貨とするは、先に欲望充足の全體を以て經濟となせるものに均しく倣りに漠然たり。而して占取變化其自身を以て目的とするを經濟行爲となすは、純然自足經濟時代に就ては最も適切を覺ゆる處なれども、國民經濟時代にあつては、此占取此變化は其自身目的にあらず、他に存する目的を達する爲めの手段のみ。蓋し經濟行爲の目的は其自身に存せず。經濟行爲は一の順應活動たるに過ぎずして、其順應の基礎の別に存することは、到底否定するを得ざる所なればなり。河上學士は說明して曰く、製本師の書籍を表裝し、之れに變化を加ふるは經濟行爲にして、學者が繙讀の際之れを毀損するは經濟行爲にあらずと。然れども、學者が繙讀を了りたる後書籍を整理するが爲めに、自ら銖と糊とを以て書籍を表裝せば如何。此行爲は經濟行爲なりや否や。又は製本師が製本の順を謬らざらんが爲め、一應其書籍を繙讀するの行爲は經濟行爲なりや否や。製本師が書籍を表裝するは變化を目的とし、學者が之れをなすときは變化を目的となさずとは言ふ能はず。繙讀の際之れを毀損するは經濟行爲にあらずして、繙讀の便利を豫め慮り、繙讀に先ち一卷を割て數部となし置く變化は經濟行爲なりや。蓋し製本師が外界の物質に變化を加ふるは、其の事自身が目的にあらず、或る目的（營利）を達せん爲の手段としてなすこと、猶ほ學者の書籍を占取し又は之れに變化を加ふるは、決して其自身を以て目的とするにあらずして、他の目的を達せんが爲めの手段としてなすと事理全く同じ。而して一は經濟行爲たり、一は然らず。卽ち知る。外界の物を占取し又は變化を加ふるを以て目的とすること、其自身直ちに經濟行爲たるにあらずして、此占取此變化は經濟的と稱する或目的を達する手段たるときは經濟行爲となり、同じく占取變更の行爲なれども、其目的經濟的ならざるときは、其行爲は又經濟行爲にあらざることを。卽ち經濟的てふ形容詞を附す可き特定の狀態の何たるやは、河上君の新說を以てしても猶未だ闡明し得られず、依然として未解の問題として殘るなり。蓋し自己缺乏感覺除却の意志を以て、外界の物質を占取又は變化するを目的とする行爲が經濟行爲ならば、人類の有意行動は皆經濟行爲たる可し。吾人は敵國に對抗する上に於て、自己の缺乏の

感覺を除却するの意志を以て、外界の物質の一たる領土を占取するを目的として、戰鬪に從事することあり、之れ又た經濟行爲なるか。他方には外界の物質を占取することもなく、又た之れに變化を加ふることもなく、唯に權利の移轉を爲すに過ぎざる行爲にして、經濟行爲たるもの甚だ多し。例せば權利株の賣買、我邦今日の電話の賣買の如きは、毫も外界の物質に關係なし。然らば此等は經濟行爲にあらざるか。河上學士の定義に從へば、然らずと言はざる可からずして、其實は何れの意味より云ふも經濟行爲となす可きことは常識の要求する所に非ずや。河上學士の新說は、經濟と經濟行動（經濟行爲）とを同一視するに於て從來の誤謬を脫却せざるものと言ふ可きか。蓋し經濟主義（本則）と云ひ經濟的財貨と云ふ、共に靜態の秩序并に此秩序の行はるゝ組織たる經濟には不可缺觀念なるは、又た他方に箇々の順應の行動たる經濟行爲の之れを以て表徵とする能はざる所以なるなり。一定持續の秩序を經營するには、必ず合理主義によりて最小の費最大の報を期せざる可からず。箇々の時に臨み機に應ずるの經濟行爲は然らず。從來の所論の經濟主義を以て經濟行爲を表徵せんとせるは、組織秩序たる經濟と順應の活動たる經濟行爲とを混同せる根本的の誤謬より傳來せる速斷なり。之れ此二者の儼然と相分つ可くして、其概念の限定亦別殊の表徵を要すとなす所以なり。

右は三十六年九月の執筆にかゝり國家學會雜誌二百號に揭げたり。

三 經濟現象と經濟生活

一

經濟現象といふ成語は予輩未だ之れを用ひたことがない。蓋し予は經濟と經濟行爲との混同を匡すことが現今經濟學の最も急務とす可き所であると信じて居るが故に、此の二つを集めて一つに歸せしむべき經濟現象の論は、之れを後廻しにするを至當と信じたからである。然るに經濟と經濟行爲とを明確に區分しようといふ予輩の趣意が、或は其

主張する社會生活一元論と衝突するかの如くに考ふる人がある樣である。予輩は曾て此二つを以て圓形を畫くものゝ所爲に譬へた。此れに對して然らば其圓形を切斷する時はどうであるか、圓の中心は何であるか等の疑問を生ぜないことを保せない。乃ち玆に經濟現象なる或語を提出して問者に答へんと思ふ。

二

經濟現象とは、經濟と別たず經濟行爲と劃せず、苟くも吾人の認識に表はれ來る經濟上の現象の總體を包含して云ふのである。世間には經濟生活と云ひ乍ら、其實經濟現象を意味して居る學者も少くない。何故に經濟生活と云ひ、經濟現象と呼び、同じものに就きて、異なれる概念が成立つかと云ふに、此は其時々の觀察の立場の異なるによつて定められるのである。乍併、此二つは全く同一物に對する異なれる名稱たるに過ぎないかと云ふにさうではない。經濟現象と云ふ時には、主として動態的の概念――動態其ものと混ず可からず――であつて、經濟生活と云ふ時は、靜態的の概念――靜態とは異る――である。他の語を以て云へば、實在と云ふ點に重きを置く時には、經濟生活と云ひ、活動と云ふことに重きを置く時には、經濟現象と云ふのである。であるから、淺薄なる觀察に於ては經濟生活は經濟と同義に落ち、經濟現象は卽ち經濟行爲の綜括的概念であるかのやうに見えるのも一應の道理はある。が、一歩を退いて考へて見るときは、經濟行爲と云ふは、極めて具體的の云ひ表はし方であつて、綜合經濟を抽象體なりと云ふに非常に語弊のあることは、予輩曾て自ら之れを匡して置いた通りである。然るに經濟生活と云ひ、經濟現象と云ふのは、共に抽象的の云ひ表はし方である。從て經濟は決して經濟生活と同一のものでない。尤も『經濟を營む』と云ふことは『經濟生活を營む』と云ふことゝ實際に於て區別することは甚だ困難であり、經濟行爲は又經濟現象でないと云ふことのできないは云ふ迄もない。併し乍ら、經濟現象は決して經濟行爲に限られない、經濟其ものも亦一の經濟現象であるし、經濟生活も亦其存在に經濟行爲を要することは疑を容るゝことはできない。

三

吾人が認識し得る經濟現象以外に、超越した經濟生活なるものが存在するか否かと云ふ問題は、抑も現象を離れて實在が考へられ得るか否かと云ふ根本の問題に逢着せざるを得ない。ヴント教授は其の『心理學』に於て、心理學とは心理的經過（卽ち心理現象）を研究するものであつて、精神其ものを研究するにあらずとするを以て、心理學最近の進歩であると主張して居られる。其意味は、心理現象を超越して其内に存在せない別個の精神と云ふものは、科學的認識に於てはあり得べからざるところであると云ふのである。此意味から云へば、無論經濟現象以外又は以上に、經濟生活なるものがあり得ないと斷言するを要するは云ふ迄もない。去り乍ら、現象と全く殊別して生活と云ふことが考へ得らるゝや否やの問題はさて措き、何故に從來の學者が經濟生活と云つたり、經濟現象と云つたり、又此二つの語によつて表はされた概念の間に大なる混同をなして居るかと云ふことを考へて見るに、之は經濟と經濟行爲とを明確に分別せざる結果であると云ふの外は說明の下しやうがない。多くの學者の所謂經濟生活は、經濟と云ふことを適切に言ひ表はさうが爲めにするに過ぎないので、而して經濟現象と云ふ時には、其が經濟生活と如何なる關係を持つて居るかを忘れてしまつて、唯漠然と經濟上の諸經過諸設備を總稱するに用ゐて、此二つが實在と變動との關係に於て立つて居るものであることには、一向注意を拂はないからこそ混同を生じたのである。

予輩は之に反して、經濟と經濟行爲とを明白に何處迄も區別すべきものなりと信ずるからして、斯くの如き幾多の語を混用する必要を見ないのみならず、一步を進めて抽象的の立場からして、更に經濟と經濟行爲とを打つて一丸となし、之に就て經濟生活と經濟現象との二つの、又同じく明かに分別するを要する概念をあて嵌めて論ずるを必要と信ずる。此意味に於て變遷消長榮枯盛衰等の時空的に羅列した立場から、人類經濟上の凡ての經過を經濟現象と見、斯くの如き時空的の制限なく、悉く一元に歸して觀察する點から、之を經濟生活と見るべきものであらうと思ふ。かく云へば、單に立場の相違に外ならない樣であるが、さう簡單に云ひ切る事も亦許されない。過去・現在・未來と分つと云ふのと、

今と云ふ一轉瞬に於てと云ふのとは、其實立場が違つて居るのではなくして、一は之を披いて見るのと、一は之を約めて見るのとの相違である。であるから、予輩は經濟學の純理と經濟史とは、畢竟同一物であると主張するのである。經濟生活の內に凡ての經濟現象は包まれてあると云ふこともできるし經濟現象の外には到底經濟生活を求むるを得ないと云ふことも亦できる。否經濟現象は卽ち經濟生活であり、經濟生活は卽ち經濟現象であることは、如何なる研究法を以てしても之を許容せざるを得ない。經濟生活其ものに過去現在未來に涉る變遷洋の東西國の內外に從ふ消長のあるが如く、經濟現象は又時空的制限を離れて、一貫一元の理法あることを容るゝものである。

四

今如上の說明を經濟學中最も重大であつて、人の普く知つて居る問題について敷演して見よう、卽ち價値の問題是である。價値には使用價値と交換價値との二つの區別あることは、誰も知つて居る所であるが、近來墺太利學派が主觀的價値客觀的價値の區別を始めてから以來、大に流行し出した。が主觀的價値が如何にして客觀的價値となり、其が亦如何にして價格となり、價格が如何にして物價となるかに就ては、學者の所論頗る曖昧たるを免れない。其根本の原因は、價値が價値を置かるゝもの、卽ち經濟上の財と如何なる交涉を有するかに就て、明確なる研究を缺くに存する。近來ジムメル教授は實體價値、官能價値の論を以て如上の曖昧說を打破して非常に進步した學說を唱へて居る。が此說も、實は古來哲學者の間に唱へられて居る固有價値、作用價値の區別に基きて立論されたものであることは疑を容れない。抑も價値は全く人間の心意思索の外に出でないもので、其の對象たる財其物に何等の關涉する所なきものであるか、又は財其物が價値判斷を發動せしむる唯一の目的原因であるか、此根本の問題の釋けない間は、千百の區別は單に皮相の研究に止まるのである。予輩は經濟現象に於ける價値と經濟生活に於ける價値との研究を以て、此根本の難問題を解決し得るかと思ふのである。實體價値——固有價値或意味に於ては使用價値——は、墺太利派の主觀的價値と相呼應して時空的の制限を超越した實在に援引し、官能價値——作用價値、或意味に於ては交換價値——は、墺太利派

の客觀的價値と共に過去現在未來に涉る變動、內外東西に從ふ高低に附會する傾向のあることは、少しく考慮を費す學者の容易に看破し得る所である。此點が最も重大の意義を有して居るのであつて、予輩が打破しようと思ふ根本の謬見亦其源を之に發して居る。

官能——作用卽ち交通經濟の世にあつては、多くの場合に於て、交換の用——と全然離脫した實體卽ち固有の實在——アダム・スミスの所謂作用（此謬見を適切に代表せしめやうとするには塊太利派の限界利用）——とも云ふやうな超個的の實在たる價値が存在して居ると思ふのが抑も誤である。甚しきに至ては、カントの哲學の物自體と云ふ樣なものが經濟學の所謂價値に相應すとするが如き考を懷いて居るものもある。他方には之と反對に、交換價値のみが價値でありとする學者が今日迄も尙少くない。此誤りたる立場より貨幣を論ずるから、亦非常の混同を生じて來る。貨幣が價値の表彰であると云ふ意味を貨幣其れ自身に備へて居る價値丈けしか貨幣によつて表彰せられないとする論者があるかと思へば、貨幣は價値を表彰すれば足りる者である、何も其れ自身は價値を具體して居るの必要はないと說く學者もある。『バンキング・プリンシプル』『カーレンシー・プリンシプル』に關する爭論は、今日の學者は一笑に附し去るが、其笑ふ人自ら根柢に於ては同樣の誤謬に陷つて居るので、紙幣又は信用券の貨幣との交涉に就て、今日迄明確なる說明の下されてないは、畢竟玆に基くのである。予輩が常に Money is what money does と繰り返して主張するの意は卽ち此にある。貨幣は貨幣たるが故に貨幣たるので、其外に面倒な詮義はいらぬものであると信ずる。信用券が貨幣たる時は貨幣たるに過ぎないので、貨幣と雖も貨幣たらざる時には貨幣でないのである。其價値を表彰すると云ふ意味は、卽ち貨幣の貨幣たる所以と云ふことである。分り易く云へば、時空的の制限の內に於て貨幣は價値を置かるゝからこそ價値の表彰と云ふので、而して又貨幣其れ自身が價値たりや否やと云ふことは、此等の時空的制限を離脫して見た上の事である。此二者が全然同一物であると云ひ得るのは經濟生活と經濟現象とが同一物であると云ふ意味に於てゝある。されば後の二者が異れりと云ふ意味に於ては、Money is what money does なる命題は、自ら二つに分れて What money is と What money does とになるので、『在る』と『爲す』とは吻合的（コインシデンス）狀態にあるものではない。であるから、實體價値は官能價値の內

にあり、官能價値は自ら實體價値に包藏せられて居るのである。主觀客觀と云ふ時も亦然りである。何故と云ふに、主觀客觀と云ふのは對待の云ひ表はし方であつて、主觀的價値ばかりあつて、客觀的價値がないと云ふのも、又其反對の場合も共に自家撞着である。現象卽ち生活なりと云ふ意味に於いては、客觀的價値は悉く主觀的判斷に基くと斷言するもよし、凡ての主觀的價値判斷は客觀的の現象を活動原因として有して居るといふことも亦云へるのである。之を手短かに云へば、體を離れての用なく、用のなきもの亦體なしと云ふことである。他の語を以て云へば、人なき境なく、境なき人も亦なしと云ふことである。

五

以上は僅かに其一端を示したのであるが、經濟學の根本概念は、凡て如上の意味に於て觀察してこそ、始めて撞着と混同とを免るゝを得るであらうと信ずる。經濟上の凡ての活動は經濟生活の活動であつて、而して又活動して居る經濟現象たるに外ならない。國民經濟領域經濟都市經濟村落經濟と云ふが如き經濟組織は、經濟生活の其時々に於て取つて居る最高の組織であると共に、時空的制限の上から見れば、順次に發展して來た經濟現象の階段的形態を表はして居るものである。其內に『凡て』が包まれてあり、而して『凡て』の內に亦た必ず此等の各種の形態が存在して居るのである。故に、經濟學の純理は、之を一の系統に配列して組織論的（モルフオロギツシエ）に研究するし、經濟史は之を時と處とに涉つて發展史的（ゲシヒトリヒ）に研究するのであつて、此等の組織又は形態を構成する根本概念も、亦常に組織的の研究と、發展史的の研究との二つを必要とする。主として重きを措く所が體系の上にある時は、經濟生活の研究となり、時空に涉る行程の上にある時は、經濟現象の解剖となるのである。

右は三十八年七月起稿し雜誌『商業界』第四卷一號に載せたるものなり。

一

價値を分て使用價値交換價値の二種となすはアダム・スミス以來の通說なり。近來更に主觀的價値客觀的價値の別を以て此兩者を掩はんとするものあり。然れども兩者共に價値を論じて未だ盡さゞるものあり、最近伯林の碩學ジムメル敎授は、卽ち實體價値と官能價値との論を立てたり。實體價値とは價値を置かるゝものゝ實體が欲望を充たし又は人生に有用なるの謂ひにして、官能價値とは實體の發動して千差萬別の官能となるに方り、人の欲望を充たし人生に有用なるの謂ひなり。然れども諸官能の合計は實體と一致することあり、然らざることあり、玆に於てか墺太利學派殊にヴヰーザー敎授の稱へたる限界利用論も亦其の適用を見るなり。諸官能の合計が實體と一致するときは、一の部分は他の部分と毫も相分つこと無きが故に其利用も亦均し、故に限界利用なるものを發生することなし。之れに反して諸官能の合計が實體と一致せざる時は、一の部分は他の部分と相均しからず、從て其人生に於ける利用も亦不同なるを免かれず。最初の部分より最終の部分に至る間幾多の階段を成して其利用を遞減し行くものなり。而して其最終の部分、卽ち所謂限界に到着し利用なきに至る點を稱して限界の利用と云ふ。今經濟上の價値は多く官能價値にして實體價値にあらず故に經濟上の價値には限界利用最も有力に働くものなりとせざるべからず。ジムメル敎授は此くの如き結論に對して果して如何なる判斷を下すものなるやは、今玆に論ぜんとする所にあらず、唯敎授の實體官能價値の論は其當然の結論として、限界利用の說を認めざる可からざるを知るのみ。

ジムメルは其根本の立場より推論し貨幣が價値の尺度なりとの意を解して次の如く說けり。貨幣が價値を測るとの意は、通說によれば、物指を以て長さを度り、分銅を以て重量を秤ると等しく、尺度たる貨幣は夫自ら價値を有するを前提とすと云ふ。然れどもこは甚だ淺薄なる說明にして、貨幣が價値の尺度なりと云ふは、電氣力を測るにキロワットを以てし、光力を測るに燭力を以てし、蒸氣力を測るに馬力を以てするが如く、唯一の共同點に引直すの謂ひに過ぎず。恰も幾何學にて一線を分割するには、必ずしも其分割すべき一部と同じ長さを以て標準とするを要せず、任意の他の長さを以てするを足れりと

し、唯其任意の長さの之れが爲めに假設したる任意の線に對する關係が、等分せらるべき一定線に對して分劃せられたる部分が有する關係に等しきことを要するのみ。例へば一尺の線を三分せよとの命題に對し、吾人の爲すべきことは一尺の三分の一の長さを見出すことにあらずして、假りに一尺を三倍したる三尺の線を設け、此三尺の線と一尺の線とを連結して得たる角度を以て、各一尺の部分が命題の線の分劃せらるべき部分に對する角度とせば足るなり。貨幣の價値が一般の價値を測ると云ふの意は、卽ち是れなり。貨幣一圓と云ふ一定位の表はす價値は、一圓を價する米の一定量の表はす價値と總てに於て均一なることを要せず、亦之れを望むべきにあらず。唯三尺の線の一尺の線に對する角度は、各部分なる一尺が命題の一尺線の部分に對する角度に等しからんを要すと云ふのみ。是れを簡單に云へば、一定位の貨幣が貨幣全體に對して有する關係が、一定量の財の價値の財全體に對して有する關係に均しかれと要求するに外ならざるを云ふなり。此意味に於ては米國の學者ウォーカーが貨幣を價値の尺度と云ふは不當なり、須らく之を共同指數と改むべしと云ふと甚だ相似たり。然れどもジュメルの意は彼れにありて此れにあらず。卽ち貨幣の價値は其官能のみに存して、實體に存するを要せざるに至るべきを證明する爲め、如上の見解を下したるに過ぎず。貨幣の價値にして其實體に根據を有するものとすれば、價値の尺度たりと云ふ意は、尺度せらるべき價値と相等しき價値を夫れ自ら保有せざるべからざるは云ふまでもなし。此に於て起る問題は、經濟上の價値は主として官能價値に限らるべきものなりや否や是れなり。此れ本論の主題なり。

二

價値とは何ぞや、此問に對する學者の解答千差萬別なりと雖も、要するに 一 欲望に關連するものなること 二 利用に關連するものなることの二條件に至りては衆口一致するものゝ如し。或は價値とは欲望を充すの度合を云ふとも謂ひ、或は利用の多少に對する主觀的判斷なりと云ふが、今日の最も進歩せる學者の見解なり。今此等の見解に對して疑問となるは 一 然らば價値は必ず欲望を前提とするものにして、價値先づ在りて而して欲望發動すること是無きや否や 二 利用多きもの必ず價値多きや否や、或

は一歩を進めて限界利用多きもの必ず價値多きや否や、是れなり。

一普通欲望を定義して、缺乏の感覺と之れを滿さんとする願望是れなりと云ふ。假に此定義を許容して試に請ひ問はん。缺乏とは在るべきものゝ在らざるを云ふにあらざるか。然らば缺乏を感覺するの前或ものゝ在るべきとの感覺の存在を必要とせざるか。吾人は動植鑛三界の物に對して欲望を起すは、先づ之れが缺乏を感覺する爲めなり。而も此の感覺の中には、動植鑛三界の存在を前提とするは勿論なり、此以外（たとへば The fourth kingdom 第四物界の如き）のものに對して果して欲望を動かす事なきものなるや否や。更に轉じて問はん、吾人は缺乏を感覺せざるものに對して價値を置かざるや否や。君側の姦を除かんが爲めには、全財産を價として排ふも敢て辭する所にあらずとする時は、其犧牲とする財産は何等の價値なしと見做す爲なりや。然らず。自己に甚だ價値多き財産を犧牲とするも、尚ほ且つ奸悪の徒を除くを要すとするは、其奸悪の徒の存在せざる事が全財産よりも遙かに大なる價値を有するが爲めにあらざるか。死を鴻毛より輕しとして國難に殉ずるは、生命に何等の價値なしとするが爲めにあらず。否其生命は如此重要の瞬間に於ては重大なる價値を有するものなり。然れども此重大なる身命を有するよりも國難を排除し去ることが更に大なる價値を有するが爲めにあらずや。知る可し、吾人の價値を置くは缺乏の感覺によりてのみ支配せらるゝにあらずして却て其缺乏以前に存在を感覺し認識するが爲めなるを。

二利用とは果して何の謂ひぞや。吾人の感覺を離れたる利用の存否如何の問題は、既に大多數の學者によりて經濟學上の論議に關係なきものと見做さるゝもの如し。然れども吾人の感覺する利用其者は、價値に對して何等の交涉を有するや、其の者の存在が吾人の感覺内に於て利用ありとせらるゝの意なるか、將た亦其物の官能が吾人の感覺に於て利用ありとせらるゝとの意なるかは、未だ學者の明確なる研究を經たることなし。故に實體價値官能價値の論も此點に於て根本の研究を積むを要す。若し物の官能卽ち活動が利用なりと感覺せらるゝに過ぎざるならば、官能價値を以て實體價値を排するは當然のことたるに過ぎず。反之物の存在が利用を感覺せしむるものならば、官能價値のみを見て實體價値を見ざるは未だ盡さゞる所ありと云はざる可からず。於玆乎、退て價

値の研究に於て、殊に固有價値と作用價値との論に於て、吾人の立場を明にするの必要を見るなり。

三

固有價値と作用價値とは何を以て相分つ可しとするや。先づ此問題を決したるの後にあらざれば、兩者相互の交渉に就て立論するは無意義に落つ。エーレンフェルスは、價値が價値客體其ものに直接に關連すると然らざるとの觀點より、此區別に說き及ばす可きものなりとす。Ehrenfels, System der Werttheorie. Bd. I. 1897. S. 75 ff. 欲望を以て價値を說明すると、將た亦た利用を以てするとを問はず、其欲望其利用が價値客體其物のみを以て對象とすることあり。又は欲望と云ひ、利用と云ふは、直ちに價値客體其物に基くにあらず、價値客體は單に目的に導くところの手段として對象とせらるゝことあり。從來の經濟學の通說は、此の二の場合を明確に區別することなく、多くは其第一の場合のみに就て立論するに過ぎざるものなり。今實體價値對官能價値の論も亦全く此域を脫したりと云ふ可からざるに似たり。何故に貨幣は漸次實體價値の對象たるの域を脫し、主として官能價値對象たるに至れるやの說明は、抑も貨幣は最終且つ直接の對象として價値對象たるものなりや。將た貨幣が價値客體たるは中間間接の對象としてなりや。ジムメルの論は說て精しからざるの憾なきに非ず。從來の通說は目的に導く手段としての價値客體を看過す。然れども今日の實際生活に就て之を見る、最終直接なる對象としての價値客體は、純粹の意味に於ては殆んど是れあるを見ることなし。蓋し自足經濟を出でゝ營利經濟に移り、自己生產并に顧客生產廢れて市場生產の全經濟生活を支配するに至れる今日にありては、最終の欲望充足は中間間接にして、流通の狀態にある欲望充足に比して、其大さに於ても其度合に於ても、遙かに重要の少きものたるは理の當然なりとせざる可からず。殊に今日の經濟生活に於て謂ふ所の價値現象は、之を價格現象と相離して考ふること能はず。『交換價値』なる學術上の精確甚だ乏しき成語を以て言表はされたる價値現象が經濟上唯一の價値現象なりと看做さるゝに至れるは決して偶然にあらず。此の『交換價値』と云ふは、價格と最も密接の關係に立てる價値の意にして、所謂『使用價値』なるものは、唯此

「交換價値」と關連してのみ意味ありとせらるゝに至れるは、單に學說發展の沿革の然らしむるが爲めのみにはあらず、根柢に橫はる實際上の一大事實は、此等幼稚なる學說に於ても亦全く拒否するを得ざるが爲めなり。

根柢に橫はる一事實とは何ぞや。答ふ、今日の經濟生活に於ける價値現象は主として、最終直接の對象に就て言ふものならずして、中間間接のものに就て云ふもの其多きに居ること是れなり。他の語を以て云はんか、今日の經濟生活に於ては凡ての價値客體——財幷に給付は——其自らが直ちに最終欲望充足の對象たり、若くは之れに對して利用を有するが爲めに價値付けらるゝにあらずして、是れと連絡關係する他の目的に導くの手段として價値付けらるゝものなり。マーシァルが第一次の財、第二次の財、第三次の財等の區分を施したるに對し、墺太利派の學者 Smart, Studies in Economics; Commons, Distribution of Wealth 等亦論ずる所あり就て見よ が此くの如き區別は、財其自らに固着するにあらずして、主體の意思如何によりて、常に變轉するものなるを論じたるは當を得たり。例へば石炭は暖爐用に供せらるゝときは第一次の財たり、厨房に於て割烹用に供せらるゝときは第二次の財たり、割烹用具を造る鍛冶用に用らるれば第三次の財たるが如き是なり。然り而して石炭商の庫中に在る石炭は第一次用の爲めに賣渡さるゝ時は庫中に在りて第二次の財たり。第二次用の爲めに賣渡さるゝときは第三次の財たりしと云はざる可からざる可し。之れマーシァルの區分論の實際に於て殆んど無用なるを明示するものにあらずや。之に反し、一方に於ては、或は暖爐用、或は厨房用或は鍛冶用に供せらるゝときと、他方に於て石炭商の庫中に在るときとは、石炭は二の根本的に相異れる狀態にあるものならずや。然るに從來の學說は殆んど之れを忘れたるが如き觀あり。前者の場合は其用途各甚だ相差異すと雖も、其燃燒せらるゝ「之れを通說は「消費」と名く」が爲めに、價値付けらるゝに至ては、共に一なり。而して其之れに對する欲望は最終にして直接なり。之れに反し後者の場合は然らず。燃燒せらるゝが爲めに直接に價値付けらるゝにあらず。燃燒せらるゝが爲めに價値付けらるゝなる事實と、何等かの意味に於て關連する、中間間接の欲望充足の用あるが爲めに價値付けらるるものたるなり、一言を以て之れを約せんか、今日の經濟生活に於ては、價値は最終直接の欲望充足を唯一の決定原因とするものにあらず。否多くの場合に於ては中間間接の欲

望充足が主たる決定原因たり。然り、然りと雖も中間間接と云ふの意は、更らに他の意義を有す。何ぞや。

四

中間間接と云ふの他の意義とは、欲望せらるゝものが、其物自らの爲めに欲望せらるゝにあらずして、欲望せらるゝ他の客體と何等かの關係に立つが爲めに欲望せらるゝことと之れなり。蓋し如上の引例に於て、厨房にある石炭も、石炭商の庫中にある石炭も、其間直接と間接との別は卽ち是れありと雖も、其均しく石炭其物に就て言ふものなるに至ては分つところなし。然るに之れに反し、其自らに於ては何等直接欲望充足の用を有するにあらず、唯他の直接欲望充足の用を有するものと、何等かの關係に立つが故に欲望を充足すと云はれ、而して此れが爲めに價値付けらるゝものあり。而して此くの如きものに對する價値は

一　是と何等かの關係に立つ直接價値客體の價値の大小に依て支配せらるゝは無論なれども

二　如此價値客體との間に存する連絡關係の疎密の度合によりても支配せらるゝものなるを知らざる可からず。

今如此價値を名けて間接價値となし、之れを其然らざるもの卽ち直接價値と區別するを妨げず。間接價値は欲望の強弱、利用の多少、換言すれば對象在否の如何によりてよりも、主として直接價値客體との關係の如何によりて支配せらると云ふの意は次の如し。間接價値にありては缺乏の感覺なるもの殆んど意味を有せず、其對象の存在すると、缺乏するとは、其價値の成立并に大小に向て、殆んど影響することなく、其對象が他の直接に其自らの爲めに價値付けらるゝ對象と、如何なる關係に立つやによりて定めらるゝものなり。一圓貨幣の價値は貨幣其物に對して缺乏が感覺せらるゝや否やによりて價値を生じ若くは價値の多少を定めらるゝに非ず。與へられたる時と處とに於て一圓貨幣は他の直接の欲望を充足す可き客體――米一斗と云ふが如き――と如何なる關係に立つやの度合如何によりて價値付けらるゝなり。左右田學士『信用券貨幣論』の所論が此事情を一般化し、

貨幣の素材は貨幣の價値に殆んど關渉する所なく、信用券の如き、何等の意味に於ても貨幣素材たらざるものも、亦凡ての意味に於て貨幣たりと主張するは蓋し玆に基くものなり。學士の所謂貨幣職分なるものは貨幣が他の價値客體に對して有する關係が甚だ密接にして、殆んど相互に代替的作用をなすを言ふなり。現存する一圓貨幣と現存せざる一斗の米とは、左右田學士に從へば、其關係甚だ切實殆んど相分つ可きなきものなるが故に、其價値付けらるゝの點に於ては（學士は之れを價値を客觀的に表彰すと謂ふも全く相均しとなすものゝ如し。）之れ確かに一面の眞理なり。然れども全き眞理にはあらず。

間接價値は、一の判斷に基て認識せられ、又は推定せられたる對象間の關係に繫がること此くの如し。然り而して此連絡關係は

一　因果的なるか。

二　構成的なるか。

二者孰れか一に居らざる可からず。而も此兩者の相錯綜する關係あり。之れを

三　混成的關係

と名くる不可なからん。因果的關係とは間接の價値對象が直接對象の原因たる關係を云ふ。而して其の原因たるに全部原因たることあり、部分原因たることあり。構成的關係とは間接價値對象と直接價値對象とが、全體と部分との關係に立つを云ふ。（マイノングは之を說く詳なり就て見る可し。Meinong, Psychologisch-ethische Untersuchungen zur Werttheorie. 1894. S. 85 ff.）他の語を以て云へば部分の爲めに全體が價値付けらるゝを稱して構成的關係に基く間接價値と云ふなり。例へば金鑛は其包含する金の爲めに價値付けらるゝと云ふが如き卽ち是れなり。此外尙ほ部分と部分との間にも價値關係を生ずることを想像し得られざるに非ず。然れどもこは全體と部分との間に於ける構成的價値關係と同一視す可きものにあらず。多くは『必然の惡』として認容せらるゝに過ぎざるものなり。例へば濡荷を買受くる人は全く用に耐へざるものと、克く用に耐ふるものと均しく乞れを一團と做して價値付くるが如き場合是れなり。用に耐へざる部分が用に耐ゆる部分を得るの手段として構成的に價値付けらるゝにあらず。用に耐ゆるものを得んとせば全體を一團として買受けざる可からず。而して其全體の內には又用に耐へざる冗物ありと云ふに過ぎず。蕨麥を辨ぜざるにあらず、一を

捨て他のみを取ること不可能なるが故に不得已となすのみ。或ひは此くの如くならずして一部分はより少きながら、猶其自らに對象たり得ることありとせんか、然らば此の部分間には直接の關係ありと云ふを得ず。唯だ二個の異れる價値現象が偶々一の全體中に混在すと云ふ可きのみ。例へば銀鑛に包まれたる銅の如き然り。構成的の間接價値は、畢竟部分の爲めに全體を要するが爲めに成立するものならざる可からず。然れども全體と部分とを確然分別すること容易ならず。是れ構成的間接價値と直接價値とを分つこと多く不可能なる所以なり。前に論じたるが如く、ジムメルが貨幣の價値測定は一定量の貨幣と一定量の財との間に於ける比較によるものにあらず、貨幣の全量と財の全量との對比の按分比例なりと主張するは、此の間の消息を洩すものと見るを得可きが如し。

部分が全體の爲めに價値付けられ、又は全體が一若くは數多の部分の爲めに價値付けらるゝを綜稱して、固有價値と名け、單純なる因果的關係若くは因果構成混成の關係に基く作用價値と區別す。即ち

- 價値
  - 直接……
    - 固有價値
  - 間接
    - 構成的
    - 因果的
    - 混成的
    - 作用價値

Ehrenfels, S. 77.

作用價値は絶對的の秤量によりて測定し得られず、間接價値と直接價値との關係に於てのみ測定するを得。蓋し間接價値の性質として其大さは之に繋る直接價値の大さに同じからざる可からず。而して構成的の間接價値に付ては、此關係は容易に知ることを得可し。何となれば、全體の價値は各部分の價値の合計に同じかる可ければなり。諸官能の合計は實體と一致すと云へるは即ち此意なり。作用價値は然らず。其關係甚だ複雜にして容易に測定し難し。蓋し作用價値の性質として最終なる能はず、必ず他の代替を容るゝものなればなり。從來の經濟學の通說が、再生產の勞費が價値を定むと說くは、此場合を指して云へるに外ならず。故に作用價値の存在に基く固有價値勞と費とにより、補充せられ得る

間接價値は絶對の意に於ける固有價値（作用價値の基礎たるが故に之を基礎價値 Grundwert と名く）とは異るものならざる可からず。而して此くの如く補充に要する勞と費とには容易に貨幣に換へ得可きものあり然らざるものあり。其貨幣に換へ得るものは、作用價値の代替性最も強し。之れに反して、不代替的作用價値は構成的の間接價値に均しく、其基礎價値と分つこと甚だ難し。代替的の作用價値は其大さに於て基礎價値以上に出づることなく、多くは之れに及ばざるものなり。凡ての價値關係は主體と客體とを前提す。今主體と客體との關係は

一　一對一

二　衆對一又は一對衆

三　衆對衆

の何れかなる可し。一　は之れを單獨價値と名け、二　は之れを共同價値集合價値と名け、三　は之れを普遍價値と名くるを得可し。今貨幣の價値は其何れに屬するや。此問に答ふるは聽て貨幣の實體價値と官能價値とを說明する所以なり。

五

ヘルフエリッヒは論じて曰く

貨幣の價値尺度たるの職分は、其が交換の要具たるの職分より當然出て來るものにして而して交換價値は交換に提供せらるゝてふ事實より來る一の抽象に過ぎざれば、貨幣は相互に交換せらるゝ凡ての他の交換財に毫も異ならざる交換價値を有するものならざる可からず。之に對して或は異議を挾んで云ふものあらん。交換に提供せらるゝ貨幣は物其れ自らに非ず、單に他の物の代表又は表象たるに過ぎざるものなり、貨幣は他日再び之に換へて他財を得る迄の間を媒介する中間物たるに過ぎずと。然れども此論中らず。若し貨幣が單に表象又は引渡指圖券たるに過ぎざるものとせば、之れに對しては必ず常に特定の場合、特定の分量、特定の財が與へらるるものならざる可からず。何となれば、代表又は表象と云ふときは、其代表せられ、表象せらるゝ實物の存するを要とす。然るに貨幣には如此特定の實物の存すること

なく、何物とも交換せらるゝを得。是れ流通要具たるの特性の當然の結果なり。

Helfferich, Geld. 1903. S. 476-7

と。是れ眞理の一面を見たるの論なり。何物とも、何時にても、如何なる分量に於ても、交換せられ得と云ふは必ずしも代表又は表象關係を疏外するものに非ず。何故ぞや貨幣は凡てのあり得る限りの財、あり得る限りの分量を、あり得る限りの時と所とに於て代表し表象すと云ふを得ればなり。是れ卽ち普遍價値の特性に非ずや。貨幣は凡ての衆客體と凡ての衆主體との間に於ける價値を代表し表象するなり。然れどもヘルフエリッヒが是を以て貨幣は全然無價値のものたるも妨げなしとの俗說を排斥せんとするの意や甚尙ぶ可し。而も此論は猶ほ之を擴充して、實體價値なきあるを要せざる官能價値論の誤謬を匡すに用ゐるを得ざるか。

貨幣の價値は間接價値なり。而して衆對衆の關係に於てあるが故に、因果構成の兩關係を包む處の混成的關係に於て存するものならざる可からず。是れ其が又作用價値たる所以なり。間接の作用價値は價値自らなりと云ふの意に於ては貨幣は云ふ迄もなく實體價値の上に築かれたるものなり。官能價値は此實體價値と關聯してこそ初めて實現す。二なくして他ありと云ふは論理上の架空のみ。事實を誣ふるに非れば得て維持すべからざる構造のみ。然れ共代表又は表象は無價値と同意義なりとの論正しとせんが貨幣は官能價値をも有せず、他の財の官能價値を代表し表象すと云ふ可きのみ。然るに此表象代表なる事實は衆對衆の根本關係ありて初めて存するものなり。換言すれば、普遍價値は單獨價値若くは共同集合價値のみの立場より見ては或は無價値と云ふ可く或は有價値と云ふ亦た可なり。價値の一面をのみ有し他の一面は有せずとの折半的解釋は斷じて是を容れざるものなり。普遍價値も亦全價値（Ganzwert）なり、分價値（Teilwert）には非ず。ジムメル敎授幷に左右田學士は貨幣職分の分岐を否認す。然るに貨幣が表象し、代表する價値に就ては却て分割を認め、其一なくして他あることあり得、否今後發展の趨向は實に玆に出でざる可からずと主張す。是れ其論理に於ける根本的缺陷ならずや。左右田學士が客觀的價値表彰と云ふものは實は這箇の普遍價値を髣髴の間に捉らへ得て、遂に其實體を逸し去り、僅かに水中に宿れる影の官能を拉し來れるものにあらざるな

きを得んや。普遍價値の主體は衆なり一にあらず。其客體も衆なり一にあらず。ヘルフエリツヒが特定の場合特定の量に於ける特定の財あれと要求するは普遍價値を單獨集合共同價値に引直さんとするの徒勞なるを忘れたるものなり。故にヘルフエリツヒの說く所の如くんば却て其ジムメルを打破するの論法は打破せられて降を分價値論の軍門に乞ふ可き當然の運命を有するものと云はざる可からず。特定の財量時所とを要せざることが貨幣の價値の價値たる所以なり。之れを拒否すれば貨幣に價値を拒否するか若くは之れに分價値なる官能價値のみを認めざる可からざるに陷る。貨幣の價値は特殊の性質を有すと主張せば則ち已む。苟も價値を以て主體客體の關係なりと謂ふ以上は又衆對衆の普遍價値も單獨共同集合價値と其價値たるの根柢を全く一にするものなるを認めざる可からず。ヘルフエリツヒ教授謬れり。左右田學士謬れり。而してジムメル教授も亦謬れり。

右は三十八年七月より三十九年三月に至る間に執筆し法政新誌第九卷七號第十卷一・四號に揭載す。

五　貨幣の保全と人格の保全

一

近來我邦には切りに貨幣を玩弄し樣とするものが殖へて來た。日清戰爭の後には幣制改革と云ふ大英斷を行つたが、ソレよりも猶大なる日露戰爭の濟んだ今に方ては、又モツト大なる英斷を幣制の上に施さうと云ふのであらうか、兎も角成案として顯はれて居るものは補助貨改鑄案のみに止つて居るが、既に藤澤博士の如きは一圓兌換券の性質を改めて一圓の補助紙幣と爲すべしとの意見を、盛んに新聞や雜誌上で鼓吹せられて居るし、專門の經濟雜誌上通貨だとか、通貨と物貨だとか、通貨と公債だとか云ふ議論が切りに散見する樣になつた。予は今玆に此等の特殊的經濟問題を以て一般の讀者を更らに煩はさうと欲するのではない。唯此くの如き議論の出て來る樣になつたのは、我邦の經濟上社會上の進步の兆候であることを見て甚だ喜ぶと云ふことを言ひ度いのである。蓋

し經濟生活の活動は何に於て最も顯著に現はれて來るかと云へば云ふ迄もなく貨幣に於てゞある。而して貨幣に於て顯はれて來る此の活動は、實は根柢に於て價値現象の活動と云ふ事を意味して居るのであつて、貨幣に關する問題が一部の特殊的技術的の見解から論ぜらるゝに止まらないで尚くも經濟上の現象に注意を拂つて居るものが、競て貨幣に關して何等かの意見を懷抱する樣になると云ふ事は、經濟上の自覺が益々明確になつて來た事を示めすのである。恰も成年に達する者が善惡利否の判斷に心を苦しめることが多くなつて來る樣に、一國民經濟が統一の組織としての自覺を得るに至るとき、先以て其國民の先覺者の注意を著しく刺戟する問題は貨幣問題であるのである。否々貨幣の問題に指を染める樣になつてこそ、初めて經濟上の獨立的自覺と云ふものが確立せらるゝを得るに到るのである。是れ卽ち世界何れの國に於ても經濟上の進運愈にして、所謂國民經濟成立の時期に達すると皆『メルカンチリズム』（此意味に於ては重金主義と云ふ沒理的なる譯字を用ゐても差支はない）の議論と政策とが起つて來た所以である。先以て一國民經濟の建設を確乎たらしめ樣とするには、其貨幣制度を確立することが必要である。貨幣制度を確立するには現實の貨幣が必要である。卽ち貿易均衡說等が出て、一國經濟政策は第一の目的として此貨幣を國內に充實せしむ可しと主張し、國內の產出の充分ならざる國にあつては、外國貿易の作用によつて、外國から正貨を吸收する樣にし樣と勉めるのである。故にメルカンチリズムは國民が經濟上に於て自覺を得るに到つた時に必ず起る者である。而して國民經濟一度建設せられて後、其進運駸々として終に世界の大國の班に列し樣とする時に方ては、又必ず貨幣に關する第二の大なる變遷が起つて來る。卽ち幣制整理若くは改革是である。此改革は皆價低き銀を捨てゝ價貴き金を以て其國幣制の基礎とする事に於て顯はれて來た。卽ち先第一に英國が金貨國となつたのは、又其世界諸國に冠たるの地位を確立した獨逸は、戰後の大事業として又幣制改革を行つて金貨國となつた。卽ち金貨國となると云ふ事と、世界の大國たりとの對外的自覺とは、相伴つて來て居ると云つて差支ないのである。而して此自覺は何處から起つて來るかと云ふと、要するに其大國になつた國民の價値生活の變動から出て來たと云はねばならぬ。而して斯く一度確立した

幣制なるものは、其國價値生活維持發展の最も堅固なる基礎を形成するものであつて、此基礎を危ふすると云ふ事は、決して單に經濟的特殊的の問題たるに止まらない。其國民の健全なる社會倫理生活上の大問題なのである。故に其の維持の爲めには如何に高き價を拂ふとも、奮闘せねばならぬ必要を生じて來るのである。我邦も亦此理に洩れて居ないとは、予の絮説を待たない處であらう。殊に國の運命を賭して世界の大國と戰つて居た間は、軍事上の勝敗が無論最大の問題であつたけれども、亦同時に果して能く此間に處して、我幣制を危殆に陷らしめんとする各種の出來事に美事に打克ち得可きやの大問題は繋けて我邦の上に存して居たのである。假令戰爭に於て勝利を得るとも、其價が幣制の破壞と云ふとであつたならば、我邦向後の健全なる發達は餘程の困難に陷らなければならなかつたのである。隨分苦しい場合に處した事があり、又多大な犧牲を供した事はあるが（外債の條件が不利益だと云つて攻撃した人々の中には、此點を看過した人もあつたらうと思はれる）、兎も角軍事上の勝利は外交上の勝利とは伴はなかつたけれども、幣制上の（財政上のとは云ひ度いが、少し言ひ難い）敗戰を伴はなかつた事は、實に衷心の喜を禁じ能はない處で、予輩は或意味に於ては日本海の大捷よりも、此點に向つて滿腔の愉快を感じて居るものである。而して敵であつた露國も亦た軍事上に大敗を蒙むつたが、幣制の根本的破壞を蒙らなかつたと言ふことは、世界の向後の發達の上に於て實に實に喜ばなければならぬことである。將來何國間に戰爭が起らうとも、一方の敗戰が軍事上に止まること、此度の場合の如くなることを切望せざるを得ないのである。何となれば、一國の立場から見ても幣制の破壞は毫も戰勝國の利益となることなく、他方に於て人類價値生活の變亂を來すの不利は幾分かは之れを受けない譯に行かない。廣く人類の立場に據つて之れを見れば、戰爭の慘害に加ふるに、或意味に於ては是よりも大なる慘毒を人類の上に及ぼす所の幣制の紊亂を以てすると云ふ事は、實に酸鼻の極と云はねばならぬ。獨佛戰爭は此點に於ては日露戰爭より劣等の戰爭であつた。米國南北戰爭は更らにより劣等の戰爭であつた。我邦西南の役亦然りである。

二

五　貨幣の保全と人格の保全

然らば何故に幣制の紊亂に伴ふ價値生活の變動が此くの如く兇はる可きであるか。銀行紙幣の兌換停止の害あるが爲めか。物價騰貴の弊の爲めか。正貨流出の危險の爲めか。輸入超過の恐れあるが爲めか。答へて曰ふ。此等は僅かに外に顯はれて來る部分的の現象に過ぎぬ。眞の害毒は深く潜んで根柢にある。何ぞや。曰く人格保全の基礎を破壞すること是れである。貨幣の保全は人格保全の根本要件である、前提である。此前提を壞つものは近世生活の要求たる人格保全の根柢を覆へすものである。世上の道學者は錢を憎む等と呼號して、其實其道德說が健全なる貨幣によりて養ひ築かれたる高き立場に立つて居らない自家の醜を廣告して居るのであつて、此くの如き僞善者ほど其實行に於て却て貨幣倫理の上に於て矛看多き陋劣な人間であることを看破せられないに氣が付かないのである。乍併淺く薄き議論を濫發するを好む經濟學者よりは、未だ罪のない丈け取る可き所であらう。貨幣に關する問題が金銀比價の問題や、紙幣發行法の得失等の問題に止まつて居るとして居る貨幣論者に至つては、實に始末にならないのである。

近世生活の要求する高き尙き人格の完成は、貨幣經濟の發達普及ありて始めて見ることを得たのである。人權自由の發達の最も根本的に最も切實なる前提は、健全なる幣制が其國社會生活の根柢を守護して居ること是れである。自由平等と云ふことも貨幣なる普遍價値の負擔者なくしては、空名たるに過ぎないのである。否々立憲政治は貨幣政治である。露國の專制政治はルーブルの價格變動の甚しい間は、到底何人が起るとも撤去せらるゝを得ないのである。又撤去するとは却て露國に甚しき危險を持ち來たさないことを保障し得られないのである。假令憲法が與へられずとも、幣制の確立安固が保障せらるゝに至れば、近世的の發達した人格の自由は自ら起り來らざるを得ない。政治や、宗教や、文藝や皆今日の發達は貨幣經濟に負ふ所甚大なのである。蓋し貨幣なる純客觀性の價値の負擔者が確立するによりて、始めて主觀的價値の自由にして無限なる活動が起り得るのである。自らの營養は自ら佃食して之を得ざるべからざる狀態にあつては、今日の如き上は神に肉薄し、廣さ宇宙に彌たる底の自由無限なる心靈的活動に基く文藝や學問やの樂を專一にする事は出來ないのである。貨幣あるによりて

時間も空間も縱まゝに己れの欲する儘に制馭し得るに至るのである。而して現在の經濟組織の活動の源たる企業は、其存在を此裡に有して居るのである。貨幣の普及せざる世にあつては、凡てのもの皆狹隘陋劣なる小賣商的精神に支配せられざるを得ない。如何程高尙なる人間の活動にても、此時代には超凡拔群の人を除くの外は、皆一種のハンドヴエルクとして之を營むのである。勞働と遊戲とは如此狀態にあつては十分に分岐せらるゝを得ない。貨幣あつて始めて其分岐を十分ならしめ從て最も高き意味に於ける勞働と、最も聖き意味に於ける遊戲（文藝學問卽ち然り）とが、圓滿の發達を成し遂げ得るのである。

貨幣の紊亂は卽ち此根柢を壞つものである。我々の立つ所の大地が常に震ふて居る樣な時代になつたら、人文は永久しなへに消へ去て仕舞ふであらう。貨幣の紊亂は精神上の住居を震ひ動かして、凡ての人を驅て唯だ經濟上の苦慮にのみ日を銷し、心を勞らしめるに至る。玆に至ては人格の保全は必ず破綻を來たさゞるを得ない。所謂投機熱の勃興、商業上の倫常の壞頽等は卽ち外に顯はれた現象である。何人も伊太利に暫らく住

居したものは、其民俗の嘆ずべきもの甚しき、他の幾多の麗しき所を掩ひ去るを慨けかぬものはなからう。而して伊太利に生活し旅行するものは、常に貨幣價格の變動と、鑄造僞造貨幣とに對する警戒との爲めに、其感興の大部分を殺ぎ去らるゝを感ぜぬものはなからう。曩てバウルゼン敎授の書を讀んだが、鑄造貨幣の弊害は其物自らに存するよりは、之れを誤つて受取つた人が餘程操守の堅固な人にあらざるよりは、何とかして巧みに再び之れを使用し去つて、其の損害を免れ樣との試惑を受けざるを得ないと云ふ點に存する、一の鑄造貨幣は、斯くして無數の人をして其人格上の墮落を、惡意なくして蒙らざるを得ざらしむ、是れ其の憎む可き所以であると說いてあつた、誠に至言である。西班牙衰亡の時代を研究した人は、何人も其幣制の紊亂而して其原因がペルーやメキシコから銀貨なる所謂外資を輸入した事に存することは、我邦の外資輸入論者は知つて居るであらうか？が最大の原因で、勝ち誇れるフヰダルゴは、遂に毒を盛れるミダスの樽の爲めに敗られたることを看過し得ないであらう。支那や朝鮮に旅した事のある人は此點に着目することがなかつたならば、其の人や到底物を觀るの力ない人と言はねばならぬ。國を擧げて虛言者ペテン師權謀家とならしむる最捷徑は、幣制を紊亂せしむ

るにある。政治上の腐敗等と云ふことも、幣制の確立安固なる國に於ては、大に之を緩和するの活力を存して居るが、其の弊が兩乍ら併存するときは、遂に亡國の運命を辭することは出來難い。

三

今や我邦新たに大戰に勝ち、世界の舞臺に立つて重き使命を荷つて居る。此時に方て殊に幣制の確立安固の必要を感ずる甚だ切なりと言はねばならぬ。乍併、元と我邦現在の幣制なるものは甚だ狹く薄き土臺の上に築かれて居る。名は金貨國であるけれども、實際は兌換券本位國であるの事實は、誰人かこれを否定することが出來よう。何となれば、我幣制の本たる金貨は僅かに日本銀行の庫中にのみ藏せられて居るに過ぎない。民間には毫も流通しては居らない。卽ち金貨は貨幣職分の最も主要なる流通要具とはなつて居らないのである。是れは純金國の人々の目から見れば、實に非常な異觀であるのだが、我國人は之れに慣れて（否始めから金貨等を日常使用したことがないから）少しも

怪む可き事と思つて居らぬ。是れは坦々たる順境に處して居る時は、敢て甚しく憂慮す可きでないとした處で、一朝大なる變事に遭遇するときは、此の根本的事實は直ちに其作用を顯はして來る。日露戰爭中、金杯演說だの、洋書購入の禁止だの、機械輸入差止だのと、隗分西洋の友人に度々笑はれて冷汗を流した事柄の起つたのも、其事自身は決して笑ふ可きでない、冷かす可きではない。我邦幣制の成立が由來甚だ薄弱であるとの根本事實のある以上は、如何とも致方がないので、必ずしも無學下根の俗吏共が十七、八世紀の故智を襲ふて、メルカンチリズムの再演をやつたものとのみ罵り去る可きではない。實際危い事哉々々乎たりであつたものと見へる。常陸丸事件よりも此方が遙かに我々の膽を寒からしむ可きであつたのである。然るに戰一度勝つて後は果して如何であるか。此の苦がき切なき經驗に敎へられた我々は、單に狹い低い經濟財政上の見地から云つても、先づ戰後の經營とか云ふものを行ふ可きとしたならば、一度立てた金貨本位の基礎を確實にし、安固にすることを第一の務とせねばならぬ譯ではないか。平生から廣く民間に流通して居る金貨は、一朝有事の日に當て細流の流れ入つて大海となるが如く綿々として

絶へないものである、單に中央銀行の金庫のみを當てにするは天水桶を頼みとして火事の時に水が缺乏して大騒ぎをする樣なものであつて、イクラ外資輸入をし樣が何の基金を設け樣が此天水桶主義では到底不安固たるを免れない。最も安全な貯水法は隨時隨處に水の供給を充實して置くにある。ソレデなければ歐洲諸國が何を苦んで平生重量多く取扱に不便な金貨の流通を普及するに苦慮腐心する事があらう。況して兌換券國たる我邦は、兌換券發行の手加減と云ふ危險極まる利器を、常に必ずしも國利民福のみによりて政策を立つるとの保證の（少くとも今迄は）立てられぬ階級の人々の手に置いて居るのである。是れが眞の金貨國なら、十分と迄は行かずとも、有力な監督方法が自ら備はつて居るのであるが、兌換券國たる我邦では、其監督は一に全く人爲的なのである、人爲的と云ふ事はインフォリブルでないと云ふ事を當然含んで居る。處が世の數多き戰後經營學者、積極主義論者の貨幣に關する論議は、如何なる性質のものであるかと考へて來ると、實に慄然たらざるを得ないのである。予は元來時事問題に多く容喙することを好まない。自分の分とするところは外にありとして居るのだが、此頃の樣に國を誤まる小刀細工論が流行するのを見ては、讀書子の分際をも忘れる樣にされるのである。小刀細工の目的物としては貨幣程危險なものはない。せめては廣い世間の識者が特殊的の利害論は別のものとしても、貨幣の保全は人格保全の根本要件であることを深く思つて、我が幣制の健全なる發達、名實相伴ふ本位國の確立が、決して獨り貨幣上の要求たるに止まらないことを認める樣にあり度いと思ふの餘り、此處に其大要を述べたのである。

右は三十九年三月脫稿雜誌『時代思潮』第二十七號掲載の文なり。

六　貨幣の新定義としての『カルタル・テオリー』

經濟學の研究法に關する爭論漸く熄み、學者各其專なる所に就て新たに純理を建設す可き機運熟し來りて、今玆に數年を閲す。然れども建設は事容易ならず。吾人の今日有する純理論は一として未だ試作の時期に屬せざるはあらず。唯だ極めて最近時に至り

經濟學全部の改造は、先づ貨幣竝に貨幣價値（是を交換價値の名の下に於てするは稱呼の惰力に基く、和蘭のヒアソンの如き卽ち是なり Leerboek der Staathuishoudkunde. 2. D. 1896. Blz. 53 et seq. "De Oorsprong der Ruilwaarde." の一節を味ふ可し）を中心とし、出立點とすることに存す可きの理稍進歩せる學者間に認められるゝに至れり。而も此理を認容するは其困難を減少する所以たらず、却て增加する所以たり。一　欲望——其の充足——財　二　充足の度合によりて測られたる欲望對財の關係としての價値なる二個の題目より起論せる經濟學は、更に　三　價値——貨幣——貨幣價値なる新題目を加ふるによりて、二の難問の未だ解けざるあるに、第三の最大難問を先づ釋かざる可からざる必要に逢着して、薄く弱き腦力は到底之れに堪へざらんとす。於茲問題を再び回歸して、先づ貨幣に關する概念を精査せざる可からざるに至る。然るに貨幣は從來の方法に從へば、『交換』なる一局部に閉鎖せられありて、單に『交換の要具』として論ぜらるゝのみ。經濟現象の共通の出立點として、否經濟生活成立要件の一として論ぜられたること無し、而して貨幣のみを論究の題目とする所謂貨幣論なるものに至りては、純然たる一塊の技術論のみ、手續論のみ。於茲貨幣なき欲望、貨幣なき財貨、貨幣なき欲望充足論はあり、家畜の貨幣、穀物の貨幣、布帛の貨幣、金屬の貨幣はあり、現實の經濟組織とコムメンジュレートなる貨幣論に至ては全く缺如たり。如何ぞ、凡ての形態、凡ての官能に普及する貨幣論あらんや。其の貨幣を經濟純理論より切斷し來つて、別に技術的手續的貨幣論を構成するは、恰も光を去つて色を論ずると同じきを悟らざるが如し。貨幣其物の何たるを究めずして、作用の末に走り趨て滔々言を重ぬる、之れを目して『ニュミスマテック』の一變體のみと爲す何の不可か之れあらん。

貨幣に對する學者の態度は大分して二となす可し。一　は樂觀派にして　二　は悲觀派なり。樂觀派とは貨幣の眞相の如きは別に學者の頭腦を苦しむるに及ばず、既に確定不動の見地を立て得たりとするものを云ひ、悲觀派とは貨幣の眞相を極むるは到底其力の及ばざる所なりとするものを云ふ。樂觀派大多數を占むること固より多言を須るず。唯少數の識者の深く思ひ靜かに考ふるもの、社會主義の理論中貨幣に關するもの時に深奥を得たるものあるを看過する能はず、殊に『貨幣なき經濟組織』の可能と不可能とに關し、根柢に溯つて思を凝さんと欲して能はず、懊惱煩悶の極、『我力貨幣に及ばず』

との嘆を爲すに至るものあるのみ。此少數の識者亦自ら分れて二小派を成す。一は助を哲理に求めんとするもの、二は之れを法理に求めんとするもの是れなり。大多數を包含する樂觀派は、此風潮に對して全然諒解を有せず、或は無益の徒勞として嗤笑するものあり、或は我與らずと公言して憚らざるものあり。而も別に一派の熱心なる學者あり、極力論難の鋒を銳くして、如此僻論邪說を根絶せんと勉むると共に、亦た從來の傳說中甚しき攻擊に堪へざるものを捨てゝ、名同くして實甚だ異なれる內容を緩和し來りて、其備を堅ふするに勉む。米國の學者ウォーカーが貨幣論上に於ける功績は自ら所期せずして、而して此部類に屬するものなること識者の拒否する能はざる所なり。從來の貨幣論の守備最も薄きは其職分論に在り。敎へて曰く貨幣第一の職分は『交換媒介要具』たるにあり。之に次ぐは『價値の尺度』『價値保藏要具』たること是れなりと。

（茲には系統の順序を云ふ、歷史的成立の前後に關しては自ら別に詳論を要す。）

攻擊は先づ其最弱所に乘ず。曰く『價値の尺度』とは何ぞやと。ウォーカー卽ち之を救はんとして曰く『價値の尺度』とは措辭の拙なるものなり『價値の標準』と云はんと欲するのみと。近來ジムメル敎授卽ち此の新到の援軍を逆用して却て通說軍に猛烈なる强襲を試み、敵をして殆んど危地に困厄せしむ。

第二の攻擊は『交換媒介要具』論に向ふ。曰く貨幣に代へて物を與ふるを賣と云ひ貨幣に代へて物を得るを買と云ふ貨幣は『賣買の要具』と云ふ卽ち可、『交換の要具』たる實那邊にありや。貨幣なる媒介要具なくして授受するをこそ交換とは云ふなり（賣買は交換の一種なりとの拙劣なる援助は却て累を爲す。）何ぞ論の淺薄にして不透徹なるやと。然れども弱き敵に對し勝利を誇る此攻擊論者は、其の背後に更らに優勢なる論敵あるを圖らず。賣買の要具は獨り貨幣のみに在らず、之れに代へて授受せらるゝ物あるにあらざれば何ぞ賣買あらんや。賣買と云ふ必ず二若くは其以上の要具あること、人皆之れを知る、贅論を弄する何ぞ此くの如きや貨幣の要具たる『仕拂』の爲めのみ、汝何ぞ仕拂要具論を唱へざると。然るに仕拂は債務關係の存在を前提す。故に最良の稱呼は『債務決濟要具』の一あるのみと。故クニース敎授卽ち最も有力に此の論陣を張り了て逝けり。更に全面に涉て攻擊を試むるもの亦起る。曰く貨幣の職分は之れを分割して甲の爲めの要具、乙の爲めの要具と云ふ可き者なりや。其一のみを具備するを貨幣代用物と說くは可苟くも完全な

る意味に於ける貨幣を論ず、何ぞ三と分ち、四と劃するを得可き『職分』なるもの存せんや。貨幣は唯其官能を盡くすに依りてのみ貨幣たり（"Money is what money does"）貨幣の本體と貨幣の職分との如き別箇の概念を標置する何かあると。『信用券貨幣論』の著者左右田喜一郎氏聲に應じて曰く、貨幣の職分は不可分なり、同一不二なり、其異なるが如く見ゆるは觀察點を異にするより起る言辭上の事のみと。（同書八十八頁以下）而して其の異なりて顯はるゝ最重要のものは、貨幣は『價値の客觀的表彰』たるとなりと說く。是れ既に職分論を根柢より覆へして、直ちに本體論に肉薄するものと云はざる可からず。蓋し此くの如きは、現今貨幣研究の趨勢の行く所を指示するもの、所論千差萬別にして大綱の歸する所終に多く玆に在り。而してジムメル敎授は實に此新潮流の最好の代表學者なり。ジムメルの『貨幣哲學』滔々數萬言の論ずる所、其歸着は貨幣の實體價値論を排して官能價値論を立てんとするに在り。然れども實體官能價値の論は單に貨幣に限られたるに非ず、部分の問題に非ずして全體の問題なり。敎授が貨幣素材過重の流弊を打破せんとするの意甚だ敬重す可しと雖も、其過程として實體價値官能價値の論を提出し來れること、未だ遽かに服し易からず。（前段於て略論を試みたり、就て看よ。）是れ蓋し敎授が貨幣悲觀論中 一 の哲理に助を藉らんとする一派に偏するの謗を免れざる所以なり。

然るに今は卽ちストラスブルグのクナップ老敎授其半生の研究の結果として『貨幣國定說』（Staatliche Theorie des Geldes）を提唱するに逢ふ。事未だ最近時（昨千九百五年下半）に屬し學者の論評を公けにする者多からずと雖も、敎授が新著の公刊は輓近數年間に於ける經濟學上の最大事件の一に屬し、後生學者の之れが反駁と祖述とに勉むる者踵を接して起る可きや必せり。着宿鴻儒半生の心血を傾注して成るもの、題目の如何を問はず敬重玩味す可きや勿論なり。況んや其問題の斯學最難のものに屬するをや。況んや外觀の修飾以外內容に些の變化なき幾十の貨幣論の濫發に困殺せらるゝ今の時の吾人に於てをや。敎授が新說は大體に於て其趨向をジムメル敎授と同ふす。異る所は過程に在り。若しジ氏を以て偏哲理的とするを得ば、ク氏は卽ち「二 の助を法理法制史に求んとするものとして、偏法理的と做すを妨げず。敎授自ら其著を名けて Staatliche Theorie des Geldes（Leipzig bei Duncker u. Humblot 1905 SS. 397）と云ひ、從來の貨幣論を一括して

"Staatlose Theorie des Geldes" (國家無視貨幣學說) と呼ぶに依りて徴す可きなり。『信用券貨幣論』の著者が屢々其反對說として引照せる予自らが最近數年間に於て固執せる『法貨以外貨幣なし』(同書一七三頁) との論は、同著者がジムメル教授に近きと同じ度に於て、クナップ教授の新說に近きは予の喜ぶ所なり。然れどもクナップの論は說て更に精到其の論の及ぶ所、予の逡巡未だ決し能はざる所を突破し、懸軍長驅遂に『カルタル・テオリー』(表章主義學說と假譯す) に到達す。論陣堂々結構莊大人をして嗟咨嘆稱來時の路を忘れしむ、實に學界稀に見るの偉觀とす。左右田氏フライブルグ研究室に其の評論を試み、ミュンヘンのヴァルター・ロッツ教授近く Schmoller's Jahrbuch に於て長篇の反對論を公けにせらる。予亦た驥尾に附して考究を積まんと欲す。卽ち先づ茲にクナップの論旨の大要を紹介し、他の機會に於てロッツ教授の反對論を究め、世上の學者と共に偕に研鑽のことを始むるの出立點たらしめんとす。(ロッツの反對論は明治三十九年十一月以降の法政新誌に掲ぐ。) 而してロッツの論文を載せたる Schmoller's Jahrbuch にクナップ教授自ら其新著を解題せる一文を掲ぐ ("Die rechtshistorischen Grundlagen des Geldwesens." a. a. O. S. 45 ff.)。以下摘記するもの卽ち是れに依る。

現今文明國に於て專ら仕拂要具の用を爲すものは貨幣なり。然れども貨幣は決して唯一の仕拂要具なりと思ふ可らず。卽ち先づ地金秤量制度によりて仕拂を爲したる事あり (今日清國に於けるもの卽ち是れ)。此制度は歐洲文明國には全く其跡を絕てり、故に今之れを論ずるの要なきや勿論なり。之れに反し書替取引 (Giroverkehr) によりて仕拂を完濟するの制は、今や漸く盛んに行はれ、却て貨幣の使用を壓倒せんとす。然れどもこは今本論に關係なきが故に同じく論及せず。茲に論ずるは此兩制度の中間に立つ貨幣現用制度なり。而して其主要の問題は、此制度の法制史上の基礎如何是れなり。我國家は一の『仕拂團體』(Zahlungsgemeinschaft) にして、貨幣を仕拂の用に充つるに關して一定の法制を規定す。元より吾人臣民は場合によりて或る一片の貨幣の授受を拒むこと能はざるにあらず。然れども此は私人的のことのみ、是れを以て貨幣流通に關する最終の規定を左右するの力ありと爲すは大なる誤謬なり。我が幣制の根柢は決して暗默の合意に依るものにあらず、又習慣法によるにもあらず、儼然動かす可からざる國家の命令

に基くものなり。此命令に背くは國家の公權を蔑にする所以にして、國家は此くの如き者を强制して、一般に行はるゝ規定に從ひて仕拂受取をなさしむるの權を有す。今一例を擧げん。獨逸に於ては金貨は無制限に授受す可しと規定せらる、『ターレル』亦た然り。銀貨は然らず、三十瓦克以上は受取を拒むことを得るなり。是れ本論論究の出立點なり。蓋し吾人は先づ貨幣に關する國家の法制を知らざる可からざればなり。今此の事實を考究するに方て最難の問題は左の一點に係る。曰く、

『クローネ』（十瓦克金貨の名なり）竝に『ドッペル・クローネ』（二十瓦克金貨の名なり）と稱する我獨逸の金貨が、一は十瓦克、一は二十瓦克に通用するは法律上の規定あるが爲めに然るや、否や、

是れなり。元より實際に於て『クローネ』は十瓦克、『ドッペル・クローネ』は二十瓦克に通用するものなること人皆之を知る。然れども其此くの如く一般に通用するは法律が爾く規定するが爲めに然るものなりや、將た亦た『クローネ』は十瓦克、『ドッペル・クローネ』は二十瓦克の價を有する金分を包含するが爲めに換言すれば其實質上・技術上の性質を具備するが爲めに一般に通用するものなりや。是れ至難至重の問題なり。請ふ以下此れが解決を試みん。

何れの國に於ても仕拂を言顯はすには價値の單位を以てす。瓦克と云ひ磅と云ひ圓と云ふもの是なり。此れによりて各個の仕拂は其大さを知ることを得可し。而してまた國家は鑄貨を有す。此鑄貨は或は金より、或は銀より、或は銅、『ニッケル』より成る。此の外銀行券竝に獨逸の『ライヒス・カッセンシアイン』の如き證券も亦あり。されば其材料の何なるやは先づ以て問ふを要せずとして、吾人の先づ知らざる可からざることは、其各個が何圓若くは何錢に當るか是なり。而して是れ實に國家の法制の規定する所とす。其規定の各貨幣高に明示せらるゝことは、必ずしも必要の條件にあらざるも、多くは然るものとす。例せば獨逸の『ターレル』貨の如きは、其が三瓦克に通用するものなること明記しあらずとも我邦の天保寬永文久錢亦然り。されば『ターレル』が三瓦克、文久錢が一厘に通用するは、其が國の法律に規定しあるに依る。要言すれば各個の貨幣が價値單位の何程に當るやは一に國家の法制を待つて後知る可きものとす。今實際仕拂を爲す場合に方りて起る問題は

六　貨幣の新定義としての『カルタル・テオリー』

一、仕拂ふ可き額は其價値單位の何箇（何倍又は何分）に當るや

二、仕拂に供す可き貨幣は其價値單位の何箇（何倍又は何分）に當るや

の二に外ならず。是より以上要する所一も無し。又吾人日常の生活に於て、此以外決して知る所あるなし。日本に住むものは必ず日本の貨幣を用ゐざる可からざるを知る。獨貨若くは英貨を以て物を買はんとする人あるなし。是れ卽ち日本の貨幣は、日本國家の制定せるものにして、他國は又其國の法制を以て貨幣を制定するものなるを知ればなり。此等貨幣の通用して毫も障碍を見ざるは國家の法制の力によりてなり。之を名けて『プロクラマトリツシユ』（制定的）の一現象と爲す所以なり。一國の貨幣の流通は其統治權內に立つ領土內に限る。二國共通の貨幣を用ゐるは、國家が契約によりて其流通範圍を擴張するが爲めのみ。此範圍は貨幣に關して一國と看做さるゝなり。されば完全なる獨立國は亦必ず獨立固有の貨幣を有す。國際共通貨幣の存せんことは便利上甚だ希はしきことなれども、歷史上の事實は儼として其反對に出で、新たに獨立を得る國は、必ず又新たに固有の貨幣を制定するの大勢抗す可からざるを敎ゆ。獨立固有の貨幣を有せざる國は、名は獨立と稱すれども、其事實なきを奈何せん。是に於てか貨幣は全然一の國家的制度にして、國家を離れては貨幣の何故に貨幣たるやの理を知ることは能はざることを首肯せざるを得ざる可し。然らざれば歷史に逆行するものなり。

今或一定の國に就て貨幣の法制史上の基礎は何ぞやと尋ねんか、價値の單位が其國に於て或一定の名稱を有すと云ふの一事を以て答ふ可きのみ。今獨逸を以て例證せんか、獨逸に於ては此單位は馬克と稱す。然らば此馬克なる名稱の意義は何ぞや、吾人は此によりて何ものを理解するや、此概念に一定の定義を與ふることを得るや。答て曰く、價値の單位にして一定の定義を下されたる後にあらざれば理論上之に答ふるの道なし。卽ち吾人は一馬克なる語によりて何物を意味するや。一馬克とは純金一封度の千三百九十五分の一の意なりやとの問に對して、何等の解答をも與へ難し。價値の單位とは何を意味するやの問に、正しき答を與へ得るものは誰なりや、所謂經濟學者なりや、大學若くは商業學校の敎授なりや。然り此等の人士は一馬克とは何を意味す可きものなりとの意見は必らず之れを懷抱す可し。然れども學者如何に『斯くある可し』と命令するとも、實

際の問題は終に之れによりて解決せられたるものにあらず。吾人の知らんとする所は、『斯くあり』との確定動かざる現實の解釋なり。此の答は實際の歷史の上に於いて、『斯く成り而して斯くあり』と說明するの外之れを望むこと能はず。學者の紛々たる『學說』は毫も預ることなきなり。蓋し此問に對し答を與ふるの權利と資格とを有するもの、獨り國家あるのみ。乍併國家は物言はず。於是乎吾人は唯國家實際上の行動を尋究して之をして其自らを語らしめざる可からざるなり。

今先づ通說の此問に對して與ふる解答を聞かん。予は此の種の諸說は其『モノメタリスト』たると『ビメタリスト』たるとを問はず、一括して『メタリスト』（金屬主義又たは實材主義論者と假譯す）と呼ばん。『メタリスト』は貨幣に關する凡ての現象を說明するに唯だ二個の警句を以てす。曰く、金屬、曰く信用。曰く、一磅克とは純金一封度の千三百九十五分の一を意味す、何となれば獨逸の金貨は此割合を以て鑄造せらるればなりと。而して此の定義を以て說明し得られざるものは、卽ち『信用』を以て之れを說明し去る。今假りに此說を遵奉して歷史的の考察を試みん。價値の單位の何程を仕拂ふと云ふことは、事實に於ては元來一定の金屬の何程かの量を交付することに外ならざること『メタリスト』の主張するが如し。今其金屬の塊たり、銀たり、金たるは暫く論ぜず、何にても差支なしとす可し。此等の金屬は其始は單に實材として考慮に入れられたるものたるを記せば足れり。卽ち貨幣の史的發展は、先づ『アウト・メタリズムス』（自材主義と假譯す）を以て始まる。其意は形態の如何を問はず、唯だ實材あるを必要條件とすと云ふことなり。此狀態が發達する時は如何。『メタリスト』卽ち答て曰く、金屬は一定の形態を備ふるに至る可し、卽ち仕拂の用に供するに、地金を一々秤量すること已み、一定の形態を具備したる一定の金屬片のみ仕拂の用に供せらるゝに至らんと。而して一國家が此の目的の爲めに一定の金屬を選定したる後は、其金屬は無制限に此一定の形態を取ることを得。之れ卽ち『バーレス・ゲルド』（實貨）なり。法制史上此の『バーレス・ゲルド』を以て最初の貨幣と爲す。獨逸佛英の金貨は今日と雖も、皆共に均しく『バーレス・ゲルド』なり。千八百七十一年前は獨逸の『ターレル』も亦た『バーレス・ゲルド』なりき。今日は金貨のみ然り。銀貨は無制限に此の一定の形態を取るを得さるが故に

『バーレス・グルド』にあらず。見る可し、無制限自由鑄造なる條件は『バーレス・グルド』たるに必要不可缺の條件なるを、而して此れ國家が一片の法令を以つて、或は與へ、或は奪ふを得る所のものなるを記せよ。然るに今日貨幣たるものは、獨り此等『バーレス・グルド』（實貨）のみに止まらず。銀貨は『バーレス・グルド』にあらず、然れども貨幣なり。『ニッケル』及び銅貨も亦然り。『ライヒス・カッセンシアイン』然り。銀行券然り。此二者は貨幣なれども『バーレス・グルド』にあらず『ノターレス・グルド』（假りに證券貨幣略して券貨と譯す）なり。而して此等『バーレス・グルド』ならざるは凡て銀たり『ニッケル』たり、銅たり、紙たる其材料が、無制限に貨幣の形態を取る能はざるの一事實を共通に有す。今『メタリスト』は此現象を如何に說明するや。答て曰く、券貨は信用に由て存在す。卽ち信用貨幣（クレヂツト・グルド）なりと。其の意は卽ち此券貨を有するものに、望によりて『バーレス・グルド』（實貨）を得るを得せしむ可き制度が、國法を以て設定せられありとのことなり。換言すれば、『メタリスト』は券貨を以つて實貨に對する『アンヴアイズング』（指圖證券）なりと云ふなり。而して事實に於て銀、銅、『ニッケル』は合法的に之れを金貨に兩換するを得、「ライヒスバンク」（獨逸帝國銀行）は其の公の職分として之れが義務を有す、『カッセンシアイン』竝に銀行券も亦た之れを實貨に兌換するを要するなり。卽ち現今獨逸の幣制を說明する爲めには、金屬竝に信用の二語を以てして事足るなり。卽ち獨逸現今に於ける價値の單位は、一定量の一定金屬（卽ち純金一封度の千三百九十五分の一）なりと答へて別に差支なし。實際に此一定量を有する實貨之に對する指圖證券たる貨幣以外他の貨幣存せざればなり。日本の幣制も亦然り。然れども是れ果して他國にも常に適用するを得可き一般普通の原則的說明たるを得るや。答て曰く、否、手近き一例を以て云はんか、千八百六十六年より九十二年に至る墺太利の幣制の如きは、到底之れを以て說明する能はず。何故ぞや。

當時墺太利に於ては、國家は其仕拂に充つるに不換銀行券竝に不換政府紙幣を以つてせり。今『メタリスト』の通說に從へば、此等は勿論實貨に非ず、されば信用貨幣ならざる可からず。然れども實貨と兌換すること能はざるものは指圖證券と云ふ能はず（イ破產後の經節）之を不信用貨幣とこそ呼ぶ可けれ、信用なる現象何くにかある。不換紙幣は之

を他人に推移するを得るによりて貨幣たり。言を換れば、此等『メタリスト』の所謂指圖證券は、實は何物とも引換ふること能はず、之を受取りたるものは恰も空袋を内容ありと信じて受取りたる被詐欺者に比せざる可からず。即ち彼れは已れの蒙りたる損害を、更らに他人に轉嫁す可く新たに自ら詐欺を行ふによりて、之を指圖證券たらしむるものと云はざる可からず。伊太利にて鑄造貨幣を受取る人の更らに巧みに之を仕拂に充てゝ損失を免るゝが如く然らば此場合價値の單位とは何物を意味するや。一『グルデン』とは純銀一封度の四十五分の一の謂なりしや。否、純銀一封度の四十五分の一と云ふことは、此等不換紙幣と何等の關係なきは、何人も之を拒む能はず。不換紙幣の一『グルデン』如何ぞ此一定量の謂なるを得可けん。見る可し、『メタリスト』の定義は此問に答ふる能はずして破産せることを。然らば此問は遂に之に答ふること能はざるか。否唯從來の通說が能はざるのみ、其解答の道自ら他に在り。其道とは何ぞや。塊太利不換紙幣の時代の價値の單位は實在的にあらずして、名義的なりしと答ふること是なり。即ち兌換國にありては實貨を以て仕拂ひ、不換國に於ては實貨仕拂を爲さず、唯名目上の仕拂をなすと答ふること是なり。『メタリスト』の通說を遵奉する以上、此以外解答の道なし。換言すれば、『メタリスト』は幣制整備せる國と、其然らざる國とに就て、別箇の定義を下すものに非ざれば、此現象を說明する能はず。彼等は深く考ふることなかりしが故に、其定義を唯一箇のみ具へ、其結果不換紙幣の場合を曖昧に付し去れるも、終始透徹せる說明を與ふるの餘義なきに至れば、必ず新たに此の名目主義の定義を掲げ來らざる可からざる筈なり。夫れ然り豈に夫れ然らんや、貨幣の定義は如斯二箇の全く相容れず相關係なき定義の外之を下す能はざるものならんや。貨幣は唯一箇の終始一貫統一せる定義を以て之を說明し得可き道自ら他に在り。然れども之を得んとする『メタリスト』の通說は、即ち之を捨てざる可からざるなり。其道とは何ぞや。請ふ吾人の論ずる所を聽け。

『メタリスト』は必ず如上兩個の現象を唯一の定義を以て解釋し得可しとの說に對して耳を藉すを好まず。塊太利に於ける場合の仕拂は、全然名義上に止まり、金屬貨を授受せざるものにして、之れに反する幣制整備の場合の仕拂は金屬貨を授受するものなるが故に、決して名義上の仕拂に止まるものにあらずと主張せん。今貨幣國定說は前の場合に

關しては『メタリスト』と全然見を一にするもの、其の異なる所は後の場合を許容せざるの一事に存するなり。換言すれば、前者と後者とは全然同一視す可きものにして、異なれるが如く見ゆるは透徹せざる眼孔に映ずる空像なりとするものなり。何故ぞや。此等貨幣の現象を法律上より觀察し國家の立場よりして說明するときは、金屬を授受するもせざるも寸毫も其間に軒輊す可きものなく、幣制の基礎は一に全く名義的仕拂たるの外なければなり。價値の單位は如何なる場合に於ても實質實材に繫るものにあらずして、徹頭徹尾名義的に定められゝものなり。唯仕拂用に供する箇片の、或は金屬內容を具備することあり、或は然らざることありと爲すのみ。一言を以て之れを要約すれば、金屬なる內容は法律上より觀察する時は、仕拂なる現象に必要不可缺の條件にあらずと言ふ是なり。固より各片の金屬內容が重要の作用を有するものなること殊に國際貿易に於て是を拒むものにあらず。然れども經濟上重要なりと云ふことゝ、法律上必要不可缺と云ふことゝは決して混同す可きものにあらず、兩々全く相異るものなり。今此の理を知了せんか幣制の何たるを問はず、價値の單位は一に全く名義的のものにして、實質的のものにあらざるを首肯せざる可からず。金屬內容は時に此名義と伴ひ、時に此名義と離る。總ての幣制を一貫して其最高の共通の基礎は、價値單位の名義に過ぎざることを認むるに至れば、此等紛々たる難關は一擧に之を透過し得可き而已。之れ貨幣が簡單明瞭一の杆格する所なく、矛盾する所なき統一確定の定義を得可き唯一の道にあらずして何ぞや。今此統一的の概念は、更らに二層の概念に分解するを要す。第一層の概念は仕拂是れなり。仕拂の用に供する箇片は　一　地金を秤量する制度　二　一定の印象ある箇片を授受する制度の二あり。一　の場合に於ける地金は未だ貨幣にあらず、之を名けて『ベンサトリッシエ・ツアールルング』(從量仕拂と假譯す)と云ふ可きものなり。二　の一定の印象ある箇片こそ初めて貨幣の仕拂と見る可きものなり。之を名けて『プログラマトリッシエ・グルトルング』(制定的流通)と爲すは其授受が法律上の『プログラマチョン』(制定)に準ずるが故なり。是れ從來の『メタリスト』の學說が全然看過せる重要の點なり。彼等は貨幣は一に金屬內容によりて定められる可きものと爲す。而も金屬內容は一の技術的事情に過ぎざるを忘れたり。國定學說は之れに反し貨幣の定義は法律的定義の外

なきことを主張す。制定的流通力を有する一定の印象箇片は、其の金屬より成ると、否とを問はず完全なる意味に於ての貨幣なり。今此理を言顯はすに一語を以てせんか、貨幣とは『カルタレス・ツアールンゲス・ミツテル』(表章的仕拂要具)を云ひ貨幣の貨幣たるは其『カルタリテート』(表章性)あるが爲めなりとの意なり。仕拂要具は獨り貨幣に限らず。仕拂要具の表章性を具ふるに至れる者獨り貨幣たるなり。而して表章性は一に全く法制の付與する所、其以外にこれを付與し得るものあるなし。是れ貨幣概念の第一層なり。然らば第二層は如何。

表章性を具備する仕拂要具に二あり。一　實貨　二　券貨是れなり。此二者共に制定的流通力を有す。唯其相分つ所は、其發生に關する法制の差異、即ち實貨は無制限に其形態を取るを許されたる一定の金屬あるを前提し、券貨には此前提なくして貨幣たりと云ふこと是れのみ。是れ貨幣概念の第二層なり。此二層より成る貨幣の概念ありて、始めて凡ての幣制に一貫する統一的說明に到達することを得。塊國の券貨も、英獨佛日本國の實貨も、其相分つ所は、一は金屬の前提なく、一は金屬の前提ありて、制定的流通力を付せられると云ふの一事に存するのみ。其が表章性を具備したる仕拂要具なりとの根本の概念に至ては、寸毫も軒輊する所なきなり。即ち知る、從來の『メタリスト』の說明は、全然誤謬なりと云ふ可きにあらず、唯眞理の半面のみを捉らへて、他の半面を逸したることと其過なりと云ふ可きものなるを。今之れを歷史的に說明せんか、仕拂の最始の階段は一定の金屬に束縛せられたる『アウト・メタリズム』(自材主義)之れなり。次に鑄貨の術起るに至るも、一定の金屬に束縛せらるゝことは異ならず。即ち此の二の階段に在りては『メタリスト』の主張せる如く、金屬は貨幣に伴ふものなり。然れども『メタリスト』は茲に於て停止し、更らに進んで次の階段に想到せざるが故に謬れるなり。次の階段とは即ち國家が其法制を以て貨幣の概念に干與すること之れなり。換言すれば、法制の作用を以て價値の單位を定め、之れに一定の名稱(磅、馬克、法、グルデン、圓)を認むること之れなり。此の階段は自材時代より連續一貫するものにして、此最終の階段を缺くものは貨幣たる能はざるなり。我が現在の價値單位が金屬の一定量によりて設定せらるゝは、唯其概念の第一の階段たる自材時代に於て然るのみ。之れに加はる後の階段は皆

歷史的に定められるゝものにして、技術的に定められるゝものにあらず。而して歷史的に附加せられるゝ概念とは、國家の法制を外にして存するものにあらず。是れ貨幣は國家の法制によりて貨幣たりと主張する所以なり。貨幣に金屬內容の必要なしと主張するにあらず、貨幣の技術的概念を捨てよと要求するにあらず、金屬內容のみを以つて貨幣を定義し、技術の概念を以て貨幣概念の全部を盡せりとなすの誤謬なるを指摘せんと欲する而已。貨幣の歷史を繹ねて、鑄貨の沿革變遷を研むるを無益なりとするにあらず、唯此等技術的考察は、之れに加へて法制史的考察を得ざれば完備せずと云ふのみ。鑄貨史は貨幣史の全部にあらず、別に法制史上に於ける貨幣を求む可しと爲すのみ。而して其法制史は『仕拂の法制史』たる可く、個々の斷片に『凡て』を見ずして、其が社會的の發展に於て貨幣の概念を立つ可しと說く、是れ國定學說の主張なり。而して又た貨幣概念其物の要求なり。

『メタリスト』の學說の先づ起り、而して多數の學者の唱和する所となれる、國定學說の永く起る能はず、一度起りて容易に人の首肯を得難きもの、決して偶然にあらず。蓋し外形の現象は捕捉し易く內界の現象は捕捉し難し。技術上の變遷を看取することは易く、社會生活の發展を會得することは難し。是れ貨幣の現象に於ても、先づ最も人の注意を惹き易き外形、技術的方面のみ學者に認められて、其の社會的國家的方面の度外に措かれたる所以なり。價値の單位を一定量の金屬分を以て會得するは、初學の徒に於て難しとせざる所、其が法制の力に基く歷史的概念なるを悟了することは專門學者と雖も亦容易ならず。況んや、其が全然技術的概念ならざるを知るに於てをや。然れども實際生活は學者の腦力に先て進む。今や貨幣の非技術的非實材的の性質は、所謂信用機關の擴張によりて多々益々顯著なり、之れを學理の上に於て認容するの急一日を空ふす可からず。學理の實際に後るゝは固より已むを得ざる所、要は之れに追及せんことを力む可しと爲すのみ。貨幣國定學說乃ち此必要を充たさんと欲して成る。

右は三十九年十二月稿法學新報第十六卷十二・十三號、第十七卷第一號に揭載せり。

七　貨幣の本質に關する通說とクナップ氏の新說

玆に貨幣の本質に關する從來の通說を根柢より打破したる新說としてクナップ教授の『カルタル・テオリー』の大要を紹介し置きたりしが、其の後歐米の學界に於て此新說に關して學者賛否の竟見を公にする頗る盛にして、永く不振の狀態に在りし純理研究は頓に活氣を呈するに至れるは甚だ喜ぶ可き所なり。嘗つて『信用券貨幣論』の著に於て予が所說を縱橫に論難せられたる左右田學士は、ブライブルグ大學の研究室に倚りてクナップ教授に對して論戰を開き稼大の筆深遠の研究を述べたる論文を Jahrbücher für National-Ökonomie u. Statistik 上に連載したり。予は曩時の緣故により復た此論戰に加はるを辭す可らざるを感ず、今先づ順序として從來の通說とクナップの新說との異同を明かならしむる必要あり、此れ本稿を起す所以也。

一

通說とクナップ說とは先づ『價値の單位』に關して見解を異にす。通說は曰く『價値の單位は一定の財貨の一定の分量ならざる可からず、現今に於ては此の一定の財貨は貴金屬（銀金）なり。卽ち價値の單位とは、金（若くは銀）の一定量を指すものならざる可からず』と。故に之れを名つけて『貨幣金屬學說（メタリズムス）』と呼ぶ。クナップ教授は曰く『價値の單位は何等の實質物と關連するを要せず一の名稱たるに止る』と、故に之れを名けて『貨幣名稱學說（ノミナリズムス）』と呼ぶ。此の名稱は歷史的にのみ解釋し得可きものにして、之れを有效ならしむるものは國家の法制なり、故に名稱學說は又之を『貨幣國定學說（スタートリヘ・テオリー）』と稱す。國家の法制の認めたるものは『カルタ』（表章）たるのみ故に又此說を『カルタル・テオリー』と稱す。

價値の單位は金屬の一定量を指すと云ふは、一定の財を以つて『價値の尺度』なりと前提するものならざる可からず。從てまた物價とは一定量の金若くは銀の謂なりとなすものならざる可からず。而して其金若くは銀は價値の尺度なりとなすものならざる

可からず、是れ金屬學說當然の歸結なり。名稱學說は此等の前提を凡べて否定す、何故に然りや。其の定量が價値單位（圓弗磅）を以つて表はされたる價格を有する財貨が、價値の尺度と看做さるゝに二の場合あり

一　金若くは銀其物を以つて直ちに（貨幣に鑄造せずして）仕拂の要具に充つるとき。金屬學說は曰く、金銀は一定不動の價値を有するにより、價値の尺度として最も適當なるが故に、仕拂要具として用ひらるゝに至れるものなりと。名稱學說は曰く、然らず、金銀は仕拂要具として用ひらるゝにより、一定不動の價値を有し、從て價値の尺度と看做さるゝものなりと。而して仕拂要具として用ゆると否とは國家の法制の定むる所にして、苟くも國家の認むる所となるものは、其金銀たると然らざる他の如何なるものたるとを問はず、一定不動の價値を有するに至る可く、人をして價値の尺度たるやの感を起さしむ可きなり。されば價値の尺度なりと云ふは畢竟する所、仕拂要具と認定せられたりとの謂に外ならず。されば貨幣として價格變動なき材料を得んと勉むるが如きは、事の前後を轉倒したるものなりと。

然れども此の第一の場合の如く金銀塊を以て直ちに仕拂要具とする時代は既に遠き昔の事に屬す。今日に於て問題となるは此の場合にあらずして、左の第二の場合ならざる可からず。

二　金銀を鑄貨として用ゆる場合。

例へば獨逸に於て金一封度を千三百九十五馬克と確定するが如き、我邦に於て金二分を價格の單位とし、之れを圓と稱するが如きを云ふ。此場合に於て一見金は價値の尺度たるが如く考ふるを通例とす。金屬學說は卽ち然りと答ふ。名稱學說は之れに反對して曰く、國家は人爲的に金の價を確定するのみ、千三百九十五馬克と稱せらるゝ丈けの貨幣の中に金一封度包含せらるゝは國家の法制の定むる所にして、他人の如何とも爲し能はざる所なり。金が價値の尺度たるにあらず、又金自ら此確定價を有するものにもあらず、唯だ國家の此規定にして變ぜざる限り、其國家の領內に於ては其貨幣は一定の價値を有する價値の尺度たるが如く看做さるゝに過ぎず。然るに此規定廢止せらるゝとも、其貨幣の流通異ることなし。何となれば價値の尺度たるものは一定の

金にあらずして名稱上の價値單位なればなりと。

即ち從來の通說は、金銀の實質を以て直ちに貨幣の本質なりとするに、新說は仕拂要具と認定せらるゝの一事實を以て貨幣の貨幣たる所以なりとするものなり。されば新說は價値の尺度たる一定の財なるものを前提するを必要とせず。從來の通說は社會上の一約束より生ずる凡ての現象を金たり銀たる財貨本來固有の性質なりと謬り見るものなりと論ず。通說は謂らく、人あり米一俵を十圓に賣らんとす、彼れが自ら有する一俵の米と對照するものは十圓なる貨幣中に含まれたる　金2分×10＝金20分　即ち金二匁是れなりと。新說は曰く、一俵の米と對照するものは、價格の單位と認定せられる圓の十倍是れなり。其二匁の金たると、六十匁の銀たると、十枚の兌換券たるとは問ふ所にあらず、而して其要する所は金にあらず、銀にあらず、兌換券にあらず、十圓の貨幣に換へて買ひ得可き他の財貨なり。換言すれば購買高の多少是れなりと。

二

然らば貨幣の購買力とは何、貨幣の價値とは何ぞや。此問題はまた通說と新說と相反對する重要の點なり。今此問題は分て

一　國內に於ける場合

二　國際間に於ける場合

の二とせざる可からず。クナップの選びたる例を取りて之れを說かんに、千八百五十九年墺國に於けるが如く不換紙幣を本位貨とする場合に、墺國の獨逸に對する本位貨相場、墺國に不利にして、また銀貨の『グルデン』に對して打步を有したりとせよ。金屬學說は此の場合を說明して墺國本位貨即ち不換紙幣は下落したるものにして、墺國の貨幣は購買力を減じたるものなり、されば墺國に於ける凡ての商品の價は必ず騰貴す可き筈なり、何となれば紙幣の一『グルデン』は從前よりも少き銀量と交換せらる、銀量少ければそれ丈け價値少く、從て他物と交換し得る力も亦減少す可きは當然なり、即ち此下落したる本位貨に於て言ひ表はされたる物價は一樣に騰貴す可きや當然なればなりと說けり。名稱學說即ち之れを駁して曰く、此場合は二項に分つを要す。

一　豫め協定したる價格

二　新たに行はるゝ取引に於ける價格

一の場合には價格の增減することなかる可く　二　の場合には價格の增減は賣買當事者の懸引の巧拙、實力の多少等によりて定めらる可きものにして、必ず騰貴すと斷言する能はず。卽ち　一　の場合に於ける價格は『グルデン』を以て言ひ表はされたる名稱上の價にして、金屬の分量の如きは寸毫も關係なきは論を俟たず　二　の場合も亦金屬の一定量によりて左右せらるゝものにあらず貨幣の下落は直ちに國內價格の騰貴を招致すと說くは實際の事實に反すと。通說は之れに對して云はん、然れども此場合に於て紙幣と銀との間に打歩を生じたるは、少くとも銀に對しては本位貨たる紙幣の價下落したるものなるを如何せんと。新說答へて曰く、然り、然れどもこれは本位貨の購買力一般の下落にあらず、銀と本位貨との關係の變動のみ、斯くの如き變動は本位貨と賣買商品との間に日々幾十回となく起る所のものにして、名けて價格の變動と云ふもの之れなり、貨幣の變動を以て目す可きにあらず。價格とは貨幣と商品との關係を云ふ、貨幣は一定不動なりと認定せらるゝ以上、價格の變動の絕えざるは免る可からざる當然の現象ならずや。卽ち

一　國內に於ける貨幣の購買力なるものは、價格と價格との相互關係を云ふに外ならずされば此の相互關係たる價格にして變動する時は、貨幣の購買力に變動あるや勿論なり、是れ一に全く國內に於ける需要供給の關係によりて定めらるゝものなり。されば物價一般の騰貴又は下落なき限りは、貨幣購買力一般の增加又は減少なるものあることなし。貨幣は貨幣としては何物をも買ふの力なきこと、及の及としてのみにて人を殺し能はざるが如し。之を用ゆる人ありて始めて物を買ひ、人を刺すを得るのみ。されば貨幣は一定不動の購買力を具備するを要すと云ふは、論理上の誤謬に陷るものなり、何となれば貨幣の購買力常に相異ればこそ需要供給の調和行はるゝものにして其變動を止めよと云ふは、需要者と供給者との關係一定不動なる可しと要求するものに外ならざればなり。

二　國際間に於いては貨幣の購買力なるものなし、何となれば獨逸の『ターレル』に

對して墺國の『グルデン』の下落するは貨幣としてにあらず共に均しく一の商品として起るものなり、されば其下落は貨幣としての購買力に何等の關係あるものにあらずと。

卽ち名稱學說は『貨幣の價値』『貨幣の購買力』等の語は國內に於ける場合と國際間に於る場合とを混同せしむるものにして、學理上許し難き沒理に基くものなりと主張す。國內に於ける金屬の價格の變動はあり、本位貨と外國貨との商品としての比價の變動はあり、之れに反し國內に於て貨幣の價値の變動なるものあることなく、國際間に於て貨幣の購買力の增減なるもの亦たあることなしと論ずるものなり。從て不換紙幣の增發は夫のみにては毫も國內の仕拂關係に影響するものにあらずとなす。唯だ國際關係に於て本位貨の商品としての下落あり。然れども國家が國際的仕拂に充用して餘ある額の外國貨幣を貯藏し、之を巧に運用して爲替相場の變動を防止する時は、何等の害を及さゞるものとなす。之を名稱學說の論理上の歸結とす。

三

貨幣の本質に關する從來の通說の缺陷多きことは、不換紙幣を說明するに方て殊に顯著なり。不換紙幣は健全なる貨幣にあらずと云ふことは寸毫の疑を容れざる所なり。然れども此故に不換紙幣は貨幣にあらず鑄貨のみ獨り貨幣なりとするは、說明を簡明ならしむるの利は卽ちあり。貨幣の定義としては困難を除却せずして掩蔽するものに外ならず。クナップの新說は克く之を說明し得たるものにして、殊に貨幣數量說を根絶せしむるの力あり。唯だ其論國家一片の法制に萬事を託し、經濟上の事實論の上に立論せざるは、予の遽に服從し難き所にして、價値の保藏負擔の現象に就て未だ間然する所あるを惜むものなり。以上記する所は勉めてクナップ教授の眞意を過たざらんを期し、シュモラー年報千九百六年第四號に揭げたるErläuterungen zur staatlichen Theorie des Geldes に依れり、茲に附言して叱正を待つ。

右一文四十年十一月稿法學新報十七卷十一號に揭載せり。

八　資本の韵律

千八百四十七年マルクスは共産宣言を公にして云ふやう『共産主義者は今や最も多くの望を獨逸國に繋ぐ蓋し獨逸は今や第三階級革命の前哨に立てり而して此革命は纔て第四階級革命の先驅たるの外なきものなればなり』と。然るにマルクスが此く豫言した意味の革命は終に來らず社會主義者をして甚だ失望せしめた。併し乍らマルクスが豫言を公にした其翌年即ち千八百四十八年にマルクスが無論夢想だもしなかつた大事件が續發した。其一は言ふ迄もなき政治上の大擾亂であつた。併し乍ら此大なる出來事こそマルクスの豫言した革命を持來たすものであらうと喜んだ人々を全く失望せしめて却て革命と全く正反對の現象を喚起した。其は戰役了ると共に經濟界が非常の盛況を呈し社會主義の仇敵視する資本制度の全盛を極むるに至つた事である。此の新現象は獨り戰役後起業心が勃興するといふ佛蘭西革命以後數年并にナポレオン戰爭後數年に於けると一般の原因のみに止まらず更に他に大なる世界的事件の起つた爲である。其れは外でもない同じ千八百四十八年に於て經濟史上の發見中其最大なるものに屬すべき發見が三ツも續發した事である。即ち　一　カリフォルニアに於ける金坑の發見　二　オーストラリアに於ける金坑の發見　三　メキシコに於ける銀坑の發見である。而して是皆マルクスの少しも豫想しなかつた事柄たるは無論の事である。以上兩個の原因の相伴つて生じた現象は、マルクスの惟へる如き革命にあらずして千八百五十年以降數年に亘れる起業勃興であつた。獨逸の學者が此時代を名けて『グルユンダー・ツァイト』（起業時代）と呼ぶのは、今日獨逸に於る經濟上各種の事業殊に鐵道鑛山工業銀行業が多く端を此時代に發したからである。殊に金融と企業とを結合せしむる機關、即ち佛國に謂へる『クレヂ・モビリエ』の起れる此時代にありて、此機關一度起りて新事業の創立を容易ならしむるに與つて大に力あつたのである。然るに此起業時代は數年にして去つた。勃興した起業熱は冷却し鎭靜時代が茲に來つた。併し此鎭靜は實は

守成の時であつたので、決して無爲の時代ではなかつたのである。起業時代に簇發した各種の事業中倒る可きものは倒れ健全なるものは殘り、而して其基礎を鞏固ならしめた、此の守成の時代がなかつたならば、事業の存續は期して望むべきではない。而して此の守成時代は以後十數年間に亘つた後千八百七十一年に至つて又起業心勃興の時代が來た。其近因が普佛戰爭の大捷幷に佛國からの償金の流入であつた事は多言を要せぬ。此盛時は數年の後又鎭靜時代に入つたが、千八百九十五年に至つて十九世紀掉尾の大事件として又再び起つた、其近因は金の輸入の激增と之に伴ふ起業心の勃興とである。而して以上何れに於いても起業心勃興の時は物價騰貴幷に有價證券價格の增進なる現象と相伴つた事は言ふ迄もない事である。此現象は無論貨幣額の增加を以て第一の原因とするが、此のみを以て解し盡くす可きものでない。而して物價の騰貴殊に諸有價證券の騰貴が起業心を激勵することは當然である。總じて之れをマルクスの唱へた價値革命の現象となすのが最も當を得て居やう。乍去、マルクスの第三階級續いて第四階級の革命といつたのは、此價値革命を指したのではない。故に其の共産宣言中の豫言が味方を失望させ反對者に嘲笑の辭柄を與へたのである。然らばマルクスは全く架空の豫言をした者といはねばならぬか。答へて曰く然らず。共産宣言の豫言は確に氣象學者の天氣豫報位の價値を有して居る。唯マルクスは暴風雨を豫報したが實際の天氣は晴雨交々來つたのである。現今社會黨中に於いて純マルクス派と所謂修正派とが相對抗し相角闘するのは、要するに暴風雨の豫報が外れたからである。純マルクス派は此暴風は將來に於いて必ず來る可く、又來らざるべからずと確信するに對して、修正派は此點に關してはマルクスの綱領を修正して、暴風雨なくして能く其主義を現實し得べしと主張するのである。之を局外から觀察すると興味津々たる者がある。蓋しマルクスの革命思想は佛國から得來つた者で、社會主義が今日マルクスに從つて標榜する理想は、實は皆佛國傳來の自由平等同胞主義のものに外ならぬ。否社會主義者の套語たる『プルジョア』、『プロレタリア』（我邦の社會黨は前者を紳士　後者を平民階級と譯す）といふ言葉も觀念も共に佛國からの借用物である。マルクスの時代は佛國革命思想が歐洲の人心に未だ深く影響して居た時代である、是れ彼れが先づ『プルジョア』の革命、次で『プロレタリア』の革命といふ順に

佛國流の革命來るべく、又來るにあらざれば理想の現實は期して望むべからずとなした所以で、イクラ該博な頭腦を持て居るマルクスでも、要するに時代の兒たるを免れぬ好證左である。併し之と同時にマルクスが十九世紀の後半に於いて歐洲經濟界に大變動あるべしと提唱したのは、確に先見の明を誇るべき權利を有して居る。其大變動とは卽ち千八百四十八年以後の起業時代と守成時代との交々相出入して、終に今日にまで來つた資本制度の變遷である。

佛國革命は經濟上から觀察すれば、要するに資本制度の誕生の產聲と看做すの外はない。封建制度の遺跡を悉く打破し、階級的社會組織、特權的經濟組織を捨てゝ、自由平等主義を建つるといふことは、實は不動產本位の社會を動產本位の社會となし、土地萬能の經濟制度に代ふるに資本萬能の經濟制度を以てせんとする事である。所謂自由所謂平等は其實に於いて資本活動の自由、資本充用の平等の事であつた。自由主義其の本名は資本主義であつたのである。四海同胞とは資本階級の四海同胞であつたのである。而して資本萬能時代の來る前、此くの如き時代は必ずなくてはならなかつたのである。然るに共產宣言發表後の大變動は資本の誕生時代では無論なかつた、否その成童期であつた。此點において、マルクスは誤算をしたといふべきであらう。而して資本萬能時代、換言すれば資本本位の經濟組織は必ず他方に非資本階級を產み出すを豫言した一事に至つては、マルクスは實に先見の名を擅にして宜からう。千八百四十八年以降の大變動は經濟上の大演劇であつた。喜劇もあつた、悲劇もあつた、マルクスの後繼者も亦その反對者も均しくマルクスの書き卸した筋書を手にしつゝ此の大演劇の見物人と成つて居た。而して現今の經濟學は、實に此等見物人の手によつて成された劇評集である。現存の斯學の耆宿碩學は、皆當時年少氣銳最も刺戟を受くるに適した年齡と境遇とに在つた人々である。而して彼等は此大演劇のブルミエーたる資本の働き振りに最も深く感動せしめられた。彼等は晩年老熟の境に入り、感興鎭靜し冷靜なる判斷の生ずるに至つて、或はマルクスの興へた筋書と實際の演劇との甚だ相違せるに想ひ到つて劇評に兼ねて筋書評を試むる者あり、或は筋書の如きは全く用なきものとして專ら劇其物の研究に潛心するものあり、或は又次で來るべき二十世紀の新幕の筋書を試みんとする者ありと雖も、要す

るに往年觀劇の客たりし一事は、至大の影響を彼等の思想の上に殘して居るものである。是れ社會主義者が屢々經濟學を罵つて資本の御用學と爲す所以で、蓋し已むを得ざる處であるか、公平な見地に立つものは筋書の詳細は誤つて居つたにせよ、兎に角這箇の大演劇が或意味においては革命と名くべきもので、或は革命以上の大變遷と看做さゞるべからざるものなるを認むるにおいては一致して居る。而して予はブュヒァー先生が勞働と韵律との關係を論ぜられたに倣つて、此大變遷も亦韵律的のものであつて、資本制度完成の道行は之を名けて資本の韵律的革命といつて差支あるまいかと思ふ。

資本とは餘剩を生ずべく充用せらるゝ物貨を云ふものである。されば先づ一餘剩を生ずるを得る物貨あるにあらざれば、資本制度の存立し得ぬことは無論であるが、更に缺くべからざる要素は二餘剩を生ずべく充用せんとの創意が經濟界を支配することである。後者は卽ち企業心起業熱となつて顯はれて來る營利の衝動にして、前者は商品有價證券の如き價値の對象と之に對立する貨幣とである。千八百五十年代でも七十年代でも九十五年以後でも、必ず一方には物價の騰貴有價證券價格の騰貴なる現象と、他方には貨幣の增加なる現象とが起り、而して此が一般起業熱の昂騰と相伴つたといふのは、餘剩價値卽ち平易にいへば利益を得べき見込の激增し、從て此利益を收めんとの念の傳染病の如く流行するが爲なるを證して餘ある。而して此等現象は一は必ず原因にして、他は常に結果たりといふべきが如き簡單なるものでなく、其間の關係甚だ複雜錯綜して居るのであるが、此原因も結果も共に多くは經濟上以外の他の大事件に續いて起ること、殊に大戰爭後に起るといふことは最も顯著なる事實である。シカシながら、一度何等かの他の大事件の起つた後經濟界に起つて來る振興時代、次で鎭靜時代の絕えざる繰返しに至ては、所謂千遍一律である、此一律なる律は卽ち資本の韵律といつては不可であらうか。

此資本の韵律は、殊に四十八年以後の大演劇において最も顯著に觀客の注意を惹いて如何にするも其妙趣を永く忘れざらしむるものとなつたのではあるまいか、然るに勞働韵律論はブュヒァー先生の研究あつて以來、多數の學者の唱和する處であるに、資本御用學者といはれる程の經濟學において、未だ資本韵律論あるを聞かぬは聊か不思議の樣で

はあるが實は韵律なる言葉コソ用ゐざれ、景氣コンユンクトーア、予は の善惡又は取引所契機なる字を之に充つ の用語にてヲース及ベース（『買ひ』と『賣り』）といふて居るのは、此の資本の韵律を指して居るものではあるまいか。唯だ韵律といふは元々社會的の概念ではない（スペンサーは此を始めて社會現象に應用した人だらう）勞働の韵律といふのは、主として生理上力を用ゆるに當り、力の徒費最も少く（卽ち疲勞少くして）最も多くの技術上の結果を收めんがため、短き時差を以て筋肉を働かしめんため、一定の長短より成る韵律を具へる必要上から來たもので、彼の田植歌や機織歌の如きは、手足を動かすに歌の韵律に合せて爲さしむべく自然に出來たものであるは言ふまでもない。然るに資本の充用は專ら社會心理的の現象である、社會的とは技術的の反對を意味し、心理的たる事は必ずしも生理的たる事と合致するものではない。殊に勞働の韵律は主として短き時差を以て長韵と短韵とを交互せしむるに止つて居るが、資本の韵律は之よりも遙に長き時差を有して居て『韵の長短』のみでなく、『律の高低』といふものが之れと相伴つて、其關係は甚だ複雜である。獨國の學者ボエム・バヴエルクと獨逸の學者レキシスとが資本制度の發達は生産時間を長からしむるや短からしむるやに關し、全く正反對の意見を有し、餘の學者の贊否も亦區々なるの一事を以ても、其關係を知るの困難なること推す可きである。予の見る所では、固定資本の立場から見れば、資本制度の發達は長き時差を必要とし、流通資本から見れば、短き時差を必要とするといふ可きだらうと思ふ。資本韵律の研究は、蓋し斯學向後の趣味ある問題たる可きは之れが爲めである。

今や我邦日露の大戰を了て後一年、起業勃興の時代の眞中に立つ、日清戰役後も亦同一の現象があつた、シカシながら此兩者の間には一大差違の存することを忘れてはならぬ。日清戰後は巨額の（當時にしては）償金を得た、日露戰爭は何物をも持來さなかつた。換言すれば、資本制度存立の二大要件の一たる貨幣額の增加は、償金なる一大項目を缺いて居る。其代りあるものは、外資輸入とそれから紙（之を名けて兌換券といふ）とである。金の所有高が殖えたのでなく、紙と借金とが殖えたのである。も一つ差ふ大きな事がある。日清戰後には經濟上起業の範圍は無制限であつたが、日露戰後は大に限られて居る。卽ち何れの國においても事業の第一位に置かるゝ鐵道は、私人企業の目的物とし

ては地方鐵道を除くの外は存せぬ。幷に政府の專賣事業の增加は、ソレダケ民間企業の範圍を減縮して居る事である。他の語を以ていへば利益の見込ある事業の存在なる要素も、亦金に對する紙の如き狀態に於て在る。卽ち此等當然の結果として

一　起業に成功するも得る處は多くは紙

二　新事業は必ずしも利益の見込確實なるものゝみに止まる能はず、卽ち必無を期し難きもの、バツブル・コムバニー

といふ事と成る、紙とバツブル・コムバニーとを結果として有する起業は、必ずしも眞正の起業心のみを動機として有せず、最も惡しき意味に解すべき投機心を動機として有し、紙（株式と稱する）の濫發を以つて唯一の目的とする起業無きを保し難し。既存の眞乎健全なる企業が此潮流に漂はされて基礎の搖ぎ出すことも亦あらう（近く起つた鐘紡事件の如きは其一例と見て差支あるまい）。卽ち事情は複雜なり關係は錯綜せり、之を日清戰後に比し、之を歐洲諸國に比す、向後我邦の經濟界を支配すべき資本の韵律は、又遙に複雜遙に錯綜したるものたるべきやも計られず。觀劇の客と成つて此の複雜錯綜せる韵律に成る大ドラマを見物する今の時の吾人は、實に至幸至福の人たるを感謝すべき義務を有す、彼の紛々たる悲觀論樂觀論と云ふが如き小なるオペラ・グラスに甘んずるものは、遂に此天佑を捨つるもの、資本韵律の研究に益なし。

右は三十九年十二月執筆大坂每日新聞四十年一月六・八・九、三日分に連載す。